# NGO FEST TOKYO -2015-

FEST

~since 2010~

# 代表挨拶

2014 年 11 月より学生国際協力 NGO FEST TOKYO 代表を務めさせていただいております保泉泰宏と申します。この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

当団体は 2010 年に発足し早 5 年が経ちます。昨年、理念の改訂を行い Mission が「最良の国際協力を探求、実行、啓発する」と変更されました。Mission は当団体の使命であり、Vision を達成するための手段です。今期は「最良の国際協力の探求」に力を注ぎ試行錯誤しながら、「より良い国際協力とは何か」を追い求めました。実際のところ、「最良の国際協力」の明確な答えは出せていません。しかしただ一つ分かったことは、現地の方々、イベント、写真展に来てくださった方々、そして報告書を手に取ってくださった方々のために、「最善」を尽くすこと、これが「最良の国際協力」を見つめるための一歩だと確信しました。もちろん最善を尽くすという善意や努力が 100%結果に結び付くわけではなく、最善の手段を探究していかなければなりません。「最良の国際協力」の答えを見つけるために、この瞬間も最善を尽くし挑み続けています。

突発的に度重なるアクシデントに立ち向かい、「最良の国際協力」とは何かを追い求め、最善を尽くしてきた 1 年間の活動をどうぞご覧ください。

2015 年 11 月

第 5 期代表 保泉泰宏

～目次～


代表挨拶 ・・・1
団体説明 ・・・2
支援活動 ・・・5
パライ ・・・5
ピナハボン ・・・27
カタンゴカンゴン ・・・43
フォトワーク事業部 ・・・52
国内事業部 ・・・56
引退メンバーコラム ・・・62

# 団体説明

【正式名称】
学生国際協力 NGO FEST TOKYO

【団体理念】
Vision 世界から向こう見ずな支援をなくす
Mission 最良の国際協力を探究、実行、啓発する
Value Quest 懐疑的な探究・本質的な活動
Flexibly 柔軟な思考・最適な行動
Evenly 多様性の尊重・相補的な関係
Youthfully 自発的な挑戦・将来に亘る還元

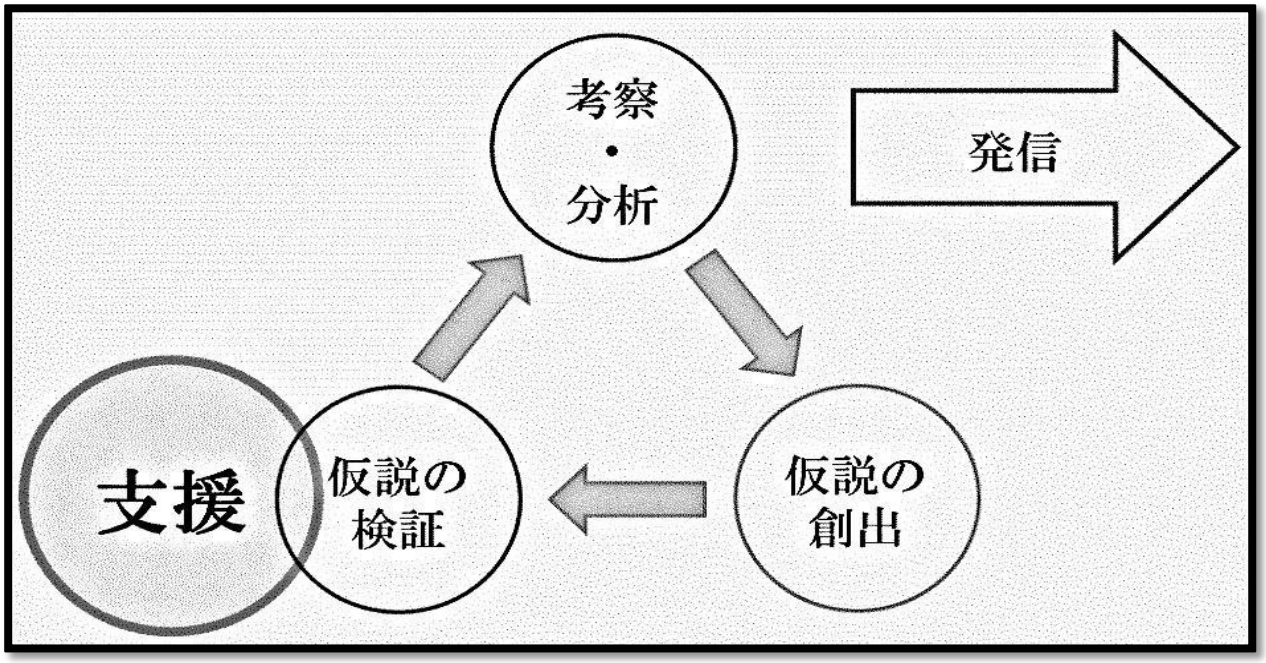
数多く存在する支援の中には被支援者が恩恵を受けられない支援があります。支援者の価値観から生まれた勝手な認識と実行が、結果として被支援者へ悪影響を与えることが往々としてあります。そのような悪影響を与える支援を世界からなくすことが「世界から向う見ずな支援をなくす」ことです。では悪影響ではない支援、良い影響を与える支援とはどのような支援でしょうか。答えはわかりません。FEST は、現地での支援活動、日本国内での啓発活動を通して、より良い国際協力の在り方を考え、探究しています。

私たちは現在、「短期完結、日本人完全撤退」を目標に、問題の発見、原因分析、解決策立案、プロジェクトの実行までを現地住民が主体で行い、継続的な発展ができることを目指しています。

【組織体制】
海外事業部…….支援地への直接的な支援活動を行います。
国内事業部…….国内での啓発活動を行います。
フォトワーク事業部…….現地との交流、写真を通した国内での啓発活動を行います。

【関係団体】
学生国際協力 NGO FEST HIROSHIMA（2012 年設立）
学生国際協力 NGO FEST OHITA（2013 年設立）

# 事業説明




私たちは「探究」の精神をもとに活動を行っています。

その中でも仮説は、自発的な学習、支援の実行から生まれる知識、経験によって創り出されるものであり、実際の支援を通じ検証されるものです。

それを支援の根底に置くことで、支援をただ与えるだけはなく現地からも情報提供を受けるという、一方のみでは獲得しえない明確なメリットのある「対等」な協力関係が生まれます。

現在、私たちは団体として**「社会的・経済的非受益者が問題解決能力を持っている」**という仮説を掲げ、スラム住民といった被支援者層の問題解決能力に焦点を当てた支援、検証活動を行っています。これは、現在考えられている以上に現地住民が問題解決、生活向上をおこなうアクターとして自ら高い能力を持っているということを証明していこうという動きです。

現在の被支援者層の抱える低い生活水準や社会的地位の低さといった多様な問題は決して彼らの能力や行動のみが原因となり引き起こされたものではありません。これらは外部的な様々な要因が複雑に絡み合い引き起こされたものです。そこで私たちは彼らを抑圧、疎外する要素を排除し、現地が自らの問題を解決する能力を持っていること、それが発揮できない要因が彼らの能力によるものではないことを現地への支援を通し検証していきます。

仮説の検証により、彼らの能力が現在よりさらに認められることは今後の国際協力業界において非常に意義のあることであると考えています。それに加え、彼らのサポートを支援者として未熟な学生が行っていることや、成果を自分たちのものとして公表することを要求されることのない学生組織であるということから、この仮説が検証されることは学生国際協力の新たな可能性を作り出すために非常に有意

義であると考えています。

　各支援地における仮説

パライ

「スラムエリア(スクワーターエリア)の住民は自ら問題解決するだけの能力を備えている」

ピナハボン

「社会的・経済的非受益者が問題を解決するために十分な能力を持っているにもかかわらずそれが発揮されていないのは、行動契機の不足、社会的抑圧、組織体制の欠落、資金不足によるものである。」

（＊社会的・経済的非受益者→ピナハボンの住民を指しており、検証後より広範囲に適用できるようにするためこの表現を採用）

カタン

「社会的・経済的非受益者が問題解決能力を持っている」

正式な文言、内容に関しては次回渡航後に決定予定

# 支援活動

## 対象地域：パライ

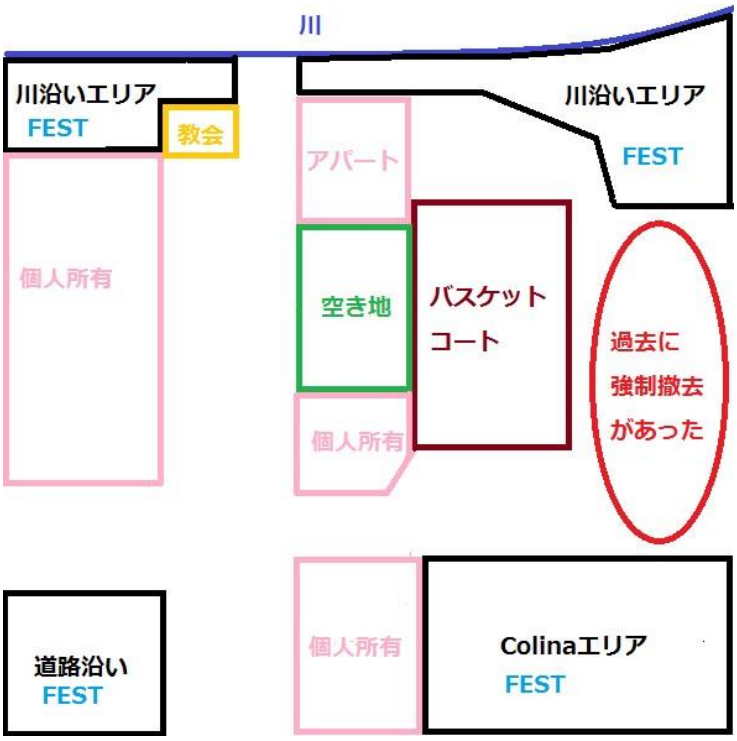
February.27～March.30/August.7～September.7

フィリピン共和国　セブ市 カサンバガン地区 パライ

(Paray)

2010 年団体創設以来支援を続けている地域です。周辺でセブ市内でも特に近年開発が進んでおり、一部地域が強制移住を求めた取り壊しを行われるなどの脅威にさらされている他、氾濫しやすい川とも隣接したおり、洪水による被害も深刻です。

# 支援地概要




（FEST と書かれている場所がプロジェクト対象地域）

パライには大きく分けて３つのコミュニティが存在しており、それぞれの生活水準や抱える問題も異なっています。ある地域はインフォーマルファミリーセクター（通称：IFS）と呼ばれる不法居住地域の一方で、自分の土地を有している住民たちもいます。しかし、各コミュニティが完全に独立しているわけではなく、各コミュニティのリーダー組織による定期ミーティングや、各コミュニティの若者たちによって組織された Youth と呼ばれる組織によって、バスケットボール大会の開催や、Fiesta と呼ばれるお祭りの際の運営など、コミュニティの垣根を超えて様々なイベントが行われています。

川沿いエリア
世帯数：72
総人口：301
土地状況：国有地占拠
血縁関係によって構成されたコミュニティであり、経済状況から見ると３つのコミュニティの中で一番水準が低い。川に隣接しているため、悪臭や洪水の被害が一番大きい。

道路沿いエリア
世帯数：13
総人口：77
土地状況：私有地選挙
血縁関係により構成されたコミュニティ。2012 年春に行われた強制立ち退きにより現在の位置に移動。経済状況は相対的に中間。バーベキューなどの飲食系スモールビジネスを行っている人がいる。

コリーナエリア
世帯数：29
総人口：145
土地状況：所有権あり
その名の通り「Colina」という一族が生活している。生活水準は一番高く、コンクリートやタイルで作られている。しかし、洪水や子供の学費の捻出が難しいなどの問題が存在する。

# 協力者紹介

ここでは、FEST の活動に積極的に協力、参加してくれる住民の方々を紹介します。

＜コリーナエリア＞

**Rheswy Colina**

FEST がパライでの活動を始めたときからプロジェクトへのアドバイスやサポートをしてくれている女性。英語が堪能であり彼女自身、昔日本の NGO の奨学金支援により大学へ進学することができたという経験があります。今回の渡航でも奨学金に関して NGO を紹介してくれたり、集会を開いた際に司会進行役として FEST と住民の間を取り持ってくれたりしました。

＜道路沿いエリア＞

**Jamester Jakosalem**

道路沿いエリアに住む青年。

仕事はマーケットでの配達業務をしています。現在 FEST への協力はとても積極的で、最近は道路沿いエリアのリーダーとして住民からも認められてきています。

**Lovejoy Capada**

FEST によく協力してくれる、道路沿いエリアに住む若い女性。普段は子育てをしつつ、内職でバナナキューと呼ばれるお菓子を売ったりしています。英語ができ、また子供が 2 人いることから親としての意見を持ち、教育プロジェクトを支えてくれています。

＜川沿いエリア＞

Chona lim

川沿いにあるサリサリストアの経営者で、自身のエリアでは住民組織のリーダーも務める女性。他のエリアの住民とも積極的に話をすることができる。FEST の考えや目的を現地住民に訳してしっかり伝えてくれるなど多くの場面で協力をしてくれた。現在は家族のために出稼ぎに出ており、パライにはいない。

Wilma

川沿いに住んでいる女性で、Chona の妹。現在パライにいない Chona に代わって、集会への参加や PJ へのアドバイスなど、積極的に FEST の活動をサポートしてくれる。特に居住地生計班の活動において、川沿いの住民をまとめる役割の一端を担っている。

## 支援内容

①教育班：Tutorial Class PJ　②居住地生計班：Job PJ、Relocation PJ

## ①教育班

用語説明

・CTU

Cebu technological university の略。外部 Tutor は全員この大学の教育学部生。

・Tutor

Tutorial class で教える先生やサポーター。

・PSPTA(Paray Students Parents and Tutors Association)

Tutorial class の団体。Tutor と Tutorial class に参加する子供の親から構成。

・バランガイ

フィリピンの最小行政区。

＜フィリピン教育の問題＞

フィリピンは出生率が高いため子供や若い人が多く、人口ピラミッドはきれいな富士山型をしています。反面、人口に見合った産業が育っておらず、一流企業への入社はおろか、定職に就ける人はごくわずかです。そしてそのような安定した職に就くためには学歴が重要となってきます。学歴がなければ、パートタイムや短期の契約社員になることが大半です。しかしながら、フィリピンの小学校での退学率は約 30%と高いままとなっています。

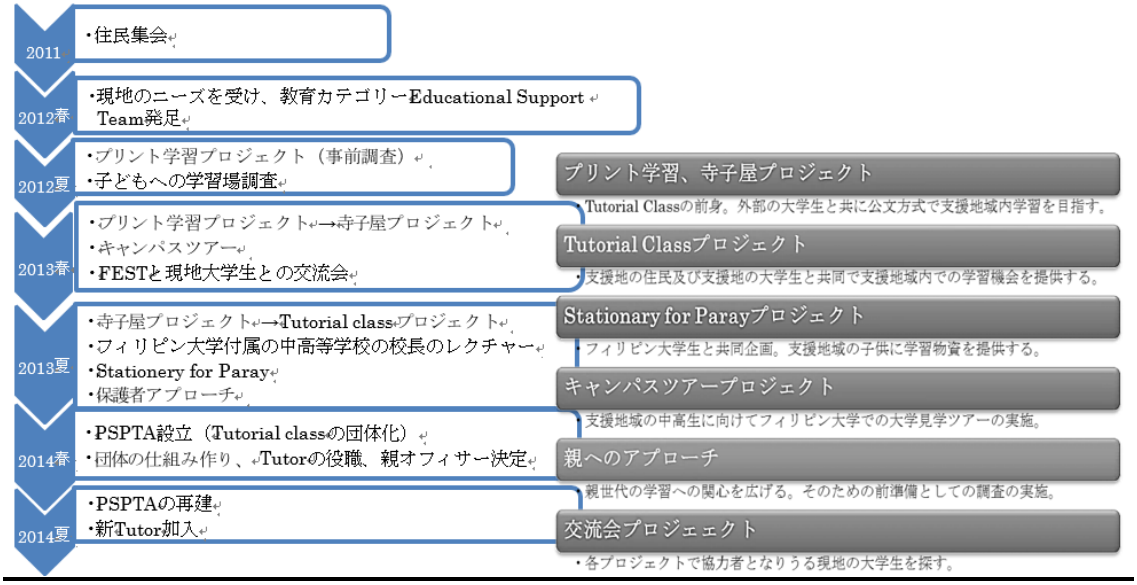
このように、フィリピンでは深刻な教育格差、さらにはそれに起因する経済格差が問題となっています。さらに親の経済事情が子供の教育にも関わってくるため、世代間にわたる貧困のスパイラルから抜け出すことができません。

そこで私たちは、学力をあげることで収入の良い職につなげ、貧困改善を目指そうと考えました。

「貧困のサイクル」の中で「教育」の部分に着目

## パライ教育班の歴史

第 1 回集会で現地から上がった教育に対するニーズに対応するべく、支援地の子どもたちに基礎的な学習環境を提供し子どもたちの学力の底上と勉強への習慣づけを行うことを目指すために立案されました。




**プリント学習 PJ**

公文式プリントを使った学習プロジェクトを企画。

→教える先生が必要となり、外部から呼びましたが住民が反発しました。

**寺子屋 PJ**

パライ住民が子供たちに教えることにしました。

→一回実施したところ、プリントがあまり必要ありませんでした。

⇒印刷代も高いので、プリントを個々人に配るのではなく、先生が一冊教科書を持つことにしました。

FEST が日本に帰っている間に寺子屋停止（実質一人のみがやっている状態）

→どうすれば先生の負担を減らせるか

⇒現地の大学生（Cebu Technological University、CTU の学生）と出会い、彼女が手伝うことになりました。

**Tutorial Class PJ**

「寺子屋」という名前が浸透しないため、名前を「Tutorial Class」に変更しました。

また、Tutor は CTU の学生が担当することとなりました。

Certification（証明書）を FEST が発行しました。

# Tutorial Class PJ

## Ⅰ目標変更

**調査①**

概要

PSPTA の意義を明確化するため、現状で行っている Tutorial Class がパライにおける貧困改善につながるかを判断することになりました。

Review：教育班＝貧困のサイクル中の教育の部分にアプローチする班

→職の獲得につながる教育を追及

Tutorial Class はその教育の問題を学力の向上によって克服しようとする PJ

内容

・高校進学・大学進学はパライ住民の貧困改善の上で適しているのか

・Tutorial Class はパライの子供たちの進学に貢献できるのか

結果

・学歴が高等教育に上がっていくにつれて、就ける職業が変わり収入も高くなっていく

・高校進学や大学進学を阻害しているのは経済的要因（学力はあるが、お金がない）

⇒Tutorial Class で貧困のサイクルを克服するのは不可能。

**調査②**

概要

（調査①で Tutorial Class は貧困サイクルの克服が不可能と判明）

Tutorial Class を打ち切るという選択肢もあったが、住民の意向を尊重して残すこととし、**Tutorial Class の目標も住民の希望に寄せる**ことにしました。そこで、住民（親）に意見を求めることにしました。

内容

・子供たちが Tutorial Class を通してどのようになってほしいか

結果

以下住民たちの意見から抜粋

「多くの知識・アイデアを得てほしい」「道徳や正しい振る舞いを得てほしい」

≪前提≫

**全ての地域・全ての世代の子が TC に通える。**

≪目標≫

**子ども達に、学ぶことに対する興味を持たせる。**

*目標設定の理由*

他の親の要望（〇〇（特定の科目）を学んでほしい・たくさんの知識をえてほしい）というのは、学ぶことへの興味を持った先のことを示しています。

学ぶことへの興味を持った先にあるのは個人によって異なる（勉強を楽しむようになる・勉強の必要性を感じる・更なる知識を求める、など）ため、目標として統一せず、その前段階を統一して目標とすることとしました。

## II Cebu Technological University への移譲

FEST が撤退した後も現地のみで続くために、Tutorial Class を FEST に代わって管理する人が必要となります。

現状

今回 FEST は CTU（Cebu Technological University）と協定を結び、以下の条件で Tutorial Class を移譲することになりました。

**・Tutorial Class を元々CTU がやっているプログラムに組み込み、単位の認定をする**

**・Certification を CTU が出す**

**・CTU で Tutor の募集・派遣ができる**

・毎週日曜日にやる　　・授業内容を学年相応にする
・パライ内のチャペルでやる（子供たちがアクセスしやすい）
・定期的に住民の意見をフィードバックする

移譲後
経過観察に移り、上記の条件を違反していないか調査します。
違反していた場合は移譲主体である CTU に改善するよう促します。

## 奨学金 PJ

2015 年春渡航での調査にて、学歴を向上させるためには金銭面からのアプローチが不可欠であることがわかりました。これを受けて私たちは 2015 年の夏渡航から、奨学金 PJ を始動させました。

＜PJ の立案経緯＞
教育班の目標「**教育による貧困改善（所得向上）**」

良い教育を受けると良い職を持てる学歴社会
↓
良い教育を受けられない理由は「お金がない」
↓
金銭面から進学率向上にアプローチする「奨学金」

＜目的＞
家庭の貧困を理由に、進学が困難だった家庭が、奨学金獲得によって、進学できるようになる。

＜概要＞
今回の渡航で私たちは以下の５つの調査を実施しました。そして、その情報を集会を通して住民たちに伝えることでまずは奨学金に関する正しい情報を知ってもらい、応募につなげていこうと考えました。集会では、住民たちから「もっとこの学校の情報がほしい」といった要望など意見が多く出され、住民たちの積極的な姿勢を見ることができました。奨学金の応募は春から始まるので、この間は奨学金の情報をもとに応募するか否かなどを考えてもらい、再度次回渡航で情報共有、そして応募へとつなげていきたいと考えています。

○奨学金プロジェクト事前準備（2015 夏渡航で実施）

① パライにおける奨学金の実態調査

パライの多くの子どもたちが Elementary、Junior High 卒業しており、さらに奨学金の存在自体は多くの住民が既に知っていました。しかし、応募条件や受給金額などに関し誤った情報を持っていたり、既得者も十分な金額ではなく新たな奨学金を探していたことから、集会にて正しく、そして新しい情報を伝えることで、応募までのアクセスを後押しできると判断しました。

パライにて奨学金集会の様子

② 奨学金調査

・Junior High…6 種類（高校、教育省、NGO）

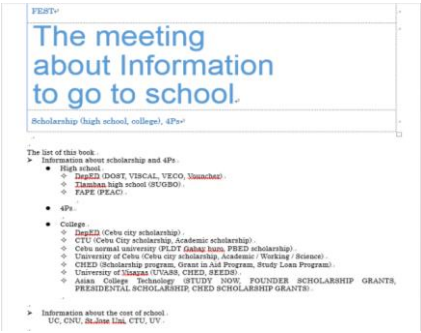
・College…17 種類（大学、教育省、NGO、企業）

・Senior High…情報なし　＊K-12 制度の影響

調査結果の考察

・条件が高い程、給付金が高く、待遇が良い。

・セブ市内の学校に通う住民は、誰でももらえる奨学金も存在。



FEST

The meeting about Information to go to school.

Scholarship (high school, college), 4Ps

The list of this book

- Information about scholarship and 4Ps
  - High school
    - DepED (DOST, VISCAL, VECO, Yuanchai)
    - Tianhan high school (SUGBO)
    - FAPE (PEAC)
  - 4Ps
  - College
    - DepED (Cebu city scholarship)
    - CTU (Cebu City scholarship, Academic scholarship)
    - Cebu normal university (PLDT Gabay hum, PBED scholarship)
    - University of Cebu (Cebu city scholarship, Academic / Working / Science)
    - CHED (Scholarship program, Grant in Aid Program, Study Loan Program)
    - University of Visayas (UVASS, CHED, SEEDS)
    - Asian College Technology (STUDY NOW, FOUNDER SCHOLARSHIP GRANTS, PRESIDENTAL SCHOLARSHIP, CHED SCHOLARSHIP GRANTS)
- Information about the cost of school
  UC, CNU, St.Jose Uni, CTU, UV

実際に配布した奨学金冊子の表紙

③ 4Ps の実態調査

・４Ps は、既に何人かの住民が取得している。

・貧困層を対象とした条件付き現金給付型の社会福祉制度。

＊受給するためには、政府から「４Ps メンバー」として選ばれる必要がある。

通常は応募できないが、特例で政府に申請書を出せば、調査結果によって、受給できるケースあり。

④ College への進学がパライにとって妥当か調査

・大学でかかる費用や大学進学によって得られる所得や社会的待遇を調査

→メリット・デメリットを提示の上、「それでも大学に行きたいのかどうか」とよく考えてもらうため。

・高卒と比較すると、大卒の方が安定した職に就け、かつ給料も良い。

＊妥当かどうかは、価値観が異なるため、FEST ではなく住民自身で判断してもらいました。

⑤ Social Worker 調査

Social Worker とは…

セブ市の全てのバランガイにて、貧しい人々や、家族の問題を調査し、ニーズに応える職業。

FEST が奨学金を住民に贈与するのであれば、Social Worker が資金面、FEST が運営面で協力。

→しかし、FEST は「短期撤退」「自立支援」を団体理念とするため、協力は困難と判断しました。

〇奨学金プロジェクト流れ

**調査**
・Junior Highは奨学金の調査、Collegeは大学進学がパライの人にとって妥当か否かの調査

**始動**
・集会実施のための奨学金に関する情報収集

**紹介①**
・奨学金情報をまとめた冊子を作成・配布し、住民に奨学金を紹介
・応募の条件や手続き、受給後の注意点などについて説明

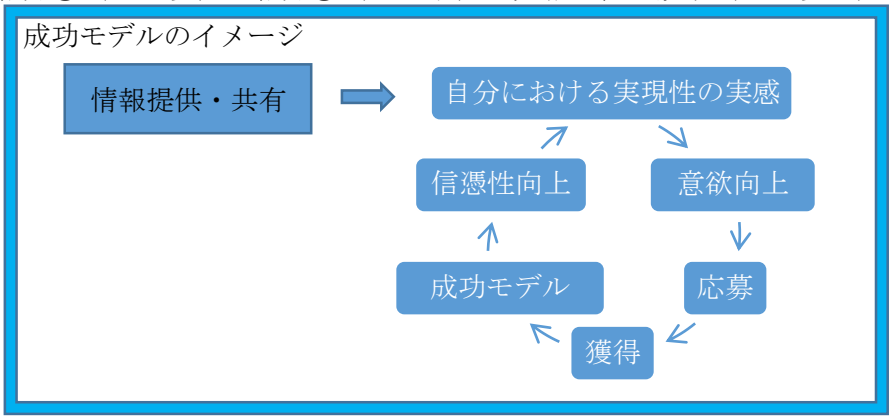
**紹介②**
・応募前に情報を更新し、再び集会を実施
　→住民に応募に関して良く考えてもらう期間を設けるため

**完結**
・進学率向上の解決策として奨学金のアプローチが有効であったかどうかを検証
・FESTの紹介によって受給者が増えたら成功

**経過観察**
・受給者がいた場合→奨学金プロジェクト完成となり、教育班として撤退
　＊例え受給者が1人でも「取った人がいる」事実が重要で、波及できれば人数は関係ない
・受給者がいなかった場合→落選した理由を聞くが、獲得のためのプロジェクトは行わない
　＊例え学力不足が原因だったとしても、Tutorial Classでは学力向上は目指していないため
　＊奨学金を必要としない水準までに所得を向上させた方が、効率的かつ有効的なため
　＊成功モデルによって波及させるという考え自体が間違いだったため

私たちは上記フローによって PJ を行うことによって、以下のサイクルにより奨学金獲得、さらにはその後の住民の生活水準向上につながると考えています。

＊調査・始動・紹介①（2015 夏）→紹介②（2016 春）→完結・経過観察（2016 夏～）




## 今後の展望

春渡航にて奨学金集会を実施し、応募への意思を後押しします。（奨学金プロジェクト流れの「紹介」以降）夏渡航からは経過観察のみを行うため、教育班としてのプロジェクトを終えることとなります。

## ②居住地生計班

支援地からの撤退を見据えた、 ”Last Project”

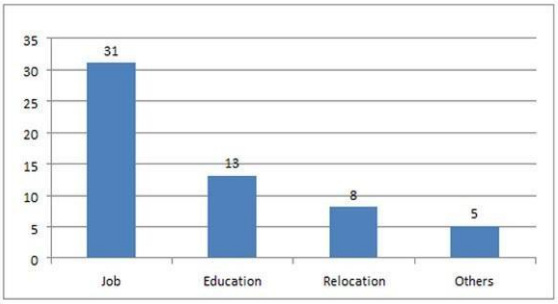
教育プロジェクト「Tutorial Class」の CTU 移譲を達成し、教育に関しては FEST 撤退後もプロジェクトの実施が可能な状態になりました。

このプロジェクトでは、住民から、「FEST と共に自分たちで解決したい問題」を挙げていただき、現地でプロジェクトチームを設立、FEST がサポートしながら問題解決を行っていくことを目標としていました。

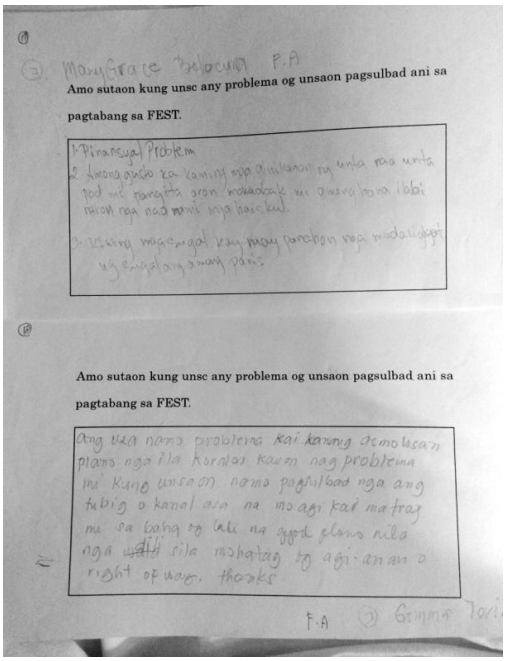
しかし、パライでは様々な要因により現地住民の FEST に対する不信感が募り、現状現地組織の PJ 立案、実行が難しい状態です。「現地住民が自らの手で問題解決できる状態」を目標に PJ を行い、現 PJ が終わった時、パライから FEST は撤退します。

## 立案背景

パライでは、教育プロジェクトの目処がたったと判断し、新たな方針を立てたため、その方針のもとプロジェクトを実施していくこととなりました。また、プロジェクトを実施していくにあたり、２０１４年の夏、再度、ニーズ調査を行いました。そこで、教育以外に、Relocation や Job の２つが問題として挙がりました。仮説をもとに行うプロジェクトということでもあり、新たに挙がったニーズにも、住民主体で活動するプロジェクトとして立案されました。




（ニーズ調査時のアンケートとその集計結果）


Amo sutaon kung unsc any problema og unsaon pagsulbad ani sa pagtabang sa FEST.

Amo sutaon kung unsc any problema og unsaon pagsulbad ani sa pagtabang sa FEST.

# Relocation　Project

（用語説明）
□公有地…フィリピン政府が保有する土地。特に支援地域パライの公有地の一部は川沿いに面しており、川沿い３メートル以内は水害の可能性が高いため、フィリピンの法律で、居住が許可されていないため、水害と共に、取り壊しの危険性が高い地域。
□私有地…一般の人（他人）が保有する土地
　→ここにおける公有地、私有地は、どちらも、パライ住民が不法に占拠している土地。そのため、取り壊しが行われる危険性がある。

□DWUP…セブ市の行政機関。貧困層向けに Relocation の土地探しや資金等の補助を行っている。

□SHFC…DWUP の協力組織で、Relocation のためのローンを組むなど、主に資金面の補助を行っている機関。

## 目的

　まず、公有地は、川に面しており、この地域は排水の設備が整っておらず、特に、セブ島が雨季に突入する８月は、川の増水により、洪水などの水害が深刻です。フィリピンにはこのような地域が多く見られ、フィリピンでは川沿い３メートル以内に居住してはいけないと定められています。そのため、川沿い３メートルで暮らす住民たちは、家を強制撤去される危険性があります。このような、洪水や強制撤去の危険から逃れるために、希望する住民が安全な地域へと移住をし、安全な生活を送ることができるようにするために活動が始まりました。
　一方、私有地は、川に面している地域はありませんが、土地代を払わずに、住んでいるため、不法占拠者として、公有地と同様に、強制撤去される危険性があります。そこで、そのような強制撤去を未然に防ぎ、継続して安全に生活ができる環境を整えるために、活動を行っています。

## 実施内容

<u>１、リロケーションを行うための情報収集や協力組織探し</u>
　私たちは春夏通して、リロケーションに必要な情報収集を行いました。この訪問の結果、包括的な援助が期待できる DWUP と住民をつなげることにしました。

<u>訪問先①DWUP</u>
　基本的には DWUP が組織化等の住民に対する補助を行い、SHFC が資金面での補助を行っている。
　提携をするプロセス：① DWUP と住民による initial meeting② DWUP から住民へアドバイス③ 契約④リロケーション⑤ 支払い
　また、協力する上で組織化することは必須ではないが、こちらが協力者（オフィサー*）を見つければ、DWUP の職員がファシリテーションして組織化を手伝ってくれる。

**訪問先②SHFC**

CMP というローンを提供している。

内容：不当に土地を占領している住民の代わりに、移住先もしくは現住所の土地を一時的に買い取り、ローンという形で返済をしてもらう事で正当な土地を獲得する補助を行う。土地の買い取りに際して、対象の土地が私有地だった場合 SHFC がオーナーを探し出し、その正当性も調べたうえで、売ってくれるよう交渉して買い取ってくれる。また公有地の場合も同じ手順で国への交渉を行う。

ローンについて：①buying property 100000php、②development the property30000php、③construction house1000php のトータル 250000php が各家庭の負担となる。返済は基本 25 年(もっと短いスパンのローンを組むことも可能)、利子 6%

２、住民たちの意思確認（2015 年春渡航）

（経緯）

上記２ヶ所の外部訪問により、DWUP 及びに SHFC と協力し本プロジェクトを遂行するという方向性が見えました。そこで、外部機関を支援地に入れることに際する住民側の対応と、リロケーションの際の資金的な能力を知るためにアンケート調査を行いました。

（アンケート詳細）

質問内容：①リロケーションをしたいかどうか　②外部機関との提携に際する抵抗感の有無

（結果）

①：８人対５人で若干多くの住民がリロケーションをしたいと答えました。

したくないと答えた人の多くは理由として、土地に慣れているからという理由を挙げていました。

②：１０人対３人の割合で大多数が提携したいと回答しました。

３、集会

目的：収集した情報を住民に共有するため。

結果：集会当日、支援地内の川が増水し、支援地への入り口が洪水状態になるほどの大雨となりました。そのためか、集会に参加した住民は公有地、私有地合わせて４名のみとなりました。後日、他の住民へも情報の共有が必要であると考え、一軒一軒個別に訪問しながら、情報共有を行いました。

ここで、最近のフィリピンの動向として川沿い 3m 以内のデモリッションが進んでいることを踏まえて、今回は優先的に公有地のリロケーションにアプローチすることに決定しました。

４、パライのリーダーとの話し合い

パライ、公有地の川沿い３メートルが強制撤去される危険性を伝えた上で、Relocation をするための協力組織の候補の情報を共有しました。そこで、リーダーに組織と協力することへの賛同を得たため、協力組織が行う Relocation のための準備として行う、Initial meeting を開くことを決定しました。

５、協力組織 DWUP との Initial meeting

公有地の川沿い３メートルに住む住民１０名と DWUP の職員４名の、計１４名で実施されました。

DWUP の職員と住民との質疑応答で話し合いが進み、結果として、Relocation のために、住民組織を結成し、その組織の中心となる、オフィサーを選挙で決めることとなりました。

**今後の展望**

**―公有地　川沿い３メートル**

2015 年夏渡航にて、協力組織である DWUP とパライの住民をつなげることは完了している。そこで、既に、協力組織の DWUP に譲渡したと考え、今後も予定されたミーティングや選挙が、住民と DWUP 間で行われていれば、FEST は関与しない方針です。しかしながら、予定されていた準備が行われなかった場合、再度、住民の意思を確認したうえで、サポート、もしくは、撤退を決定していきます。

**―私有地**

私有地を所有するオーナーに連絡をとりながら、今後、土地を購入するか、もしくは、借りるか等の考えを住民から聞き、どのようにしていきたいか、ということを住民と決定していきます。

また、FEST が把握していた私有地以外にも私有地が支援地内に存在することがわかりました。そのため、これまで、私有地に関わる情報共有が行われていない私有地の地域があります。そのため、それらの地域にも情報を共有したうえで、今後の流れを考えていきます。

# Job Project

（用語説明）

・DMDP…行政機関。職業訓練などを実施し、就労支援をしている。

・CARD…イクロファイナンスを行なっており、フィリピンのマイクロファイナンスと言えばこの会社。世界的にも有名。

・TESDA…DMDP と同じく行政機関であり、職業訓練の実施、雇用先の紹介、DMDP と連携し、Job fair の開催など、幅広い就労支援を行っている。

・スモールビジネス...支援地域パライ内で、サリサリストアと呼ばれる、身近な日用品や食料品を販売する小さなお店の開店や、バーベキューや簡単に調理したものを販売すること。

・職業訓練...DMDP や TESDA で行われている就職するために必要な技術や知識を学べる講座のこと。訓練を終了することで、証明書を受け取れ、就職にも有利になる。

## 目的

所得向上の問題を解決するための一環として、フィリピンは学歴社会であるため、FEST では、以前として将来的に所得の向上につながるために、教育支援を行ってきました。しかし、教育での所得向上は、形としてわかるまで、時間を要します。そこで、職にアプローチすることによって、所得をすぐに向上させるため、Job プロジェクトが開始されました。

## 実施内容

**2015 年春渡航**

<u>１．アンケートの実施</u>

　所得向上のための支援として、①職業訓練　②求人応募　③スモールビジネス　があると考えており、これら３つの中で、住民がどの方法でプロジェクトを行いたいか、住民のニーズを吸い上げるために調査を行いました。また、補足として、所得向上に関する質問項目も設けました。

＜アンケート項目と結果＞
所得向上に関心のある住民、１６名に回答していただきました。
また、自身での記述を求める項目については、無回答が多いという結果に終わりました。
①どのような方法で所得向上をしたいか。
□職業訓練：１名
□スモールビジネス：１３名
□求人応募：２名
②スモールビジネスをする場合、個人か集団どちらで実施したいか。
□個人：０人
□集団：１６名
③どのくらい稼ぎたいか。
□回答者なし
④現在、どのような職に就いているか。
**警備員、洗濯、縫製（服の修理）**
**その他無回答**
⑤職に就く場合、どのような職を望むか。
　専門職、ビジネス

<u>２．集会</u>

＜目的＞
アンケート結果や、FEST が収集した情報を共有するために実施しました。
＜内容＞
アンケート結果の通り、大半が、スモールビジネスを望んでいました。
しかしながら、スモールビジネスをはじめるためには、元手になる資金や、知識、技術が必要です。
そこで、FEST は、特に以下の情報の共有を行いました。
□資金不足→CARD　　□知識・技術→DMDP

＜結果＞
特に資金不足の問題が挙がりました。
情報共有を行った CARD のようなマイクロファイナンス機関は、パライの住民にとって、他金融機関との二重融資となってしまうことや、返済のスパンが短いこと、利子が高いことなどから借りることが難しいということがわかりました。そこで、FEST によるマイクロファイナンスを行うという案が挙がりました。

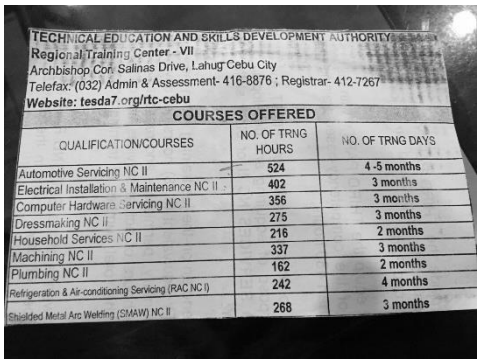
３、職業訓練 in パライ

＜目的＞
　職業訓練の存在をより多くの住民に知ってもらうために実施しました。
＜内容＞
　１日で終わる職業訓練をパライ内のチャペルで実施しました。内容は、スモールビジネス向けの料理ということで、シュウマイとスキンレスロンガニーサの２つの料理の作り方を講師の方が教えてくれました。
＜結果＞
　非常に多くの住民が参加をし、熱心に聞いていました。職業訓練終了後に、今回の経験を生かしてスモールビジネスを立ち上げようと考えているといった声や実際に自身のスモールビジネスに活用する人がいたこと、そして夏渡航でも再度このような機会を開いてほしいという要望もあり住民からは大変好評でした。しかし、DMDP はパライから少し距離が遠く、これをきっかけに他の職業訓練を始めることにはつながりませんでした。

　その後国内での活動にて今後のアプローチに関して検討したところ、マイクロファイナンスという案は実行に移されることはなく、職業訓練一つに絞られました。理由は以下の２つです。
①FEST がマイクロファイナンスを行うことが難しい。
②現地住民で、FEST 撤退後もお金を管理する住民がいない。
これにより、金銭面からのアプローチをすることは難しいという結論に至りました。この議論を踏まえて今年の夏、渡航を行いました。

**2015 年夏渡航**

４、職業訓練の情報収集（2015 年夏渡航）
職業訓練を始め、様々な職に関する補助を行う DMDP や TESDA といった行政機関に訪問しました。



TECHNICAL EDUCATION AND SKILLS DEVELOPMENT AUTHORITY
Regional Training Center - VII
Archbishop Cor. Salinas Drive, Lahug Cebu City
Telefax: (032) Admin & Assessment- 416-8876 ; Registrar- 412-7267
Website: tesda7.org/rtc-cebu

COURSES OFFERED

| QUALIFICATION/COURSES | NO. OF TRNG HOURS | NO. OF TRNG DAYS |
|---|---|---|
| Automotive Servicing NC II | 524 | 4 -5 months |
| Electrical Installation & Maintenance NC II | 402 | 3 months |
| Computer Hardware Servicing NC II | 356 | 3 months |
| Dressmaking NC II | 275 | 3 months |
| Household Services NC II | 216 | 2 months |
| Machining NC II | 337 | 3 months |
| Plumbing NC II | 162 | 2 months |
| Refrigeration & Air-conditioning Servicing (RAC NC I) | 242 | 4 months |
| Shielded Metal Arc Welding (SMAW) NC II | 268 | 3 months |

５、職業訓練希望者を TESDA へ
　支援地であるパライ全域で、「若者が興味を持っている。」という住民からの意見も取り入れ、若者を中心に職業訓練に興

味のある住民を探し、希望者と共にTESDAに訪問しました。DMDPでも職業訓練を行っているのですが、支援地からの距離が少し離れているため交通費がかかるということで、　　（職業訓練のコース一覧）
候補から外しました。
　結果としては、職業訓練のコースが予約でいっぱいだったので、予約待ちという形になりました。
また、場所によって扱っているコースに違いがあり、住民の中には一番に志望していたコースをとることができない住民もいました。

６．TESDAについてのマニュアル作成、住民に譲渡
　TESDAに訪問できなかった住民が残っていたため、職業訓練の申請方法や、コース内容が記載された、マニュアルを作成し、住民に譲渡しました。現在は、支援地パライの住民がマニュアルを管理しており、関心のある住民がすぐに情報にアクセスできるようになりました。

### 今後の展望
職業訓練を中心に所得向上を目指していますが、住民の通いやすい職業訓練所では、訓練開始まで、１年近く時間を要するとのことでした。そこで、当初の予定よりも、訓練開始や、訓練後の所得向上の結果を検証することが先になることが考えられます。そのため、訓練が開始されるまで、所得向上するために、どのようにアプローチしていくべきか見直しをしていきます。

## 仮説から見た現状分析

　FEST における仮説は、支援地ごとにたてられています。そして、我々はこの仮説の検証と同時に現地への還元を目指してきました。そのため、当初、パライ班では、「プロジェクトの主体は住民であり、ＦＥＳＴは補助を行うだけで、介入はしない」という方針を掲げていました。しかしながら、「目に見えるものを成果として認識する」という価値観と反する教育というPJしかやってこなかったことから、成果としては認識されず結果住民からの不信感や期待感の低下があること、かかわりを持った当初 FESTがPJを立案していたことから受動的な姿勢を身に着けてしまったことを受け、現地への還元、つまり被支援者のニーズを満たすことを最優先するという形に方針変更されました。これにより、FEST としてはPJの目標をFESTの立案したプロジェクトを住民の手で実行されているもしくはできる状態を目指すとし、支援の方針として、住民の意見を取り入れるが、プロジェクトの主体は FEST であるということになりました。
　これを踏まえたうえで、私たちのこれまでの支援から検証可能な範囲において、仮説の検証を行います。

【仮説】
　スラムエリア（インフォーマルファミリーセクター 通称 IFS）の住民は自ら問題解決するだけの能力を備えている

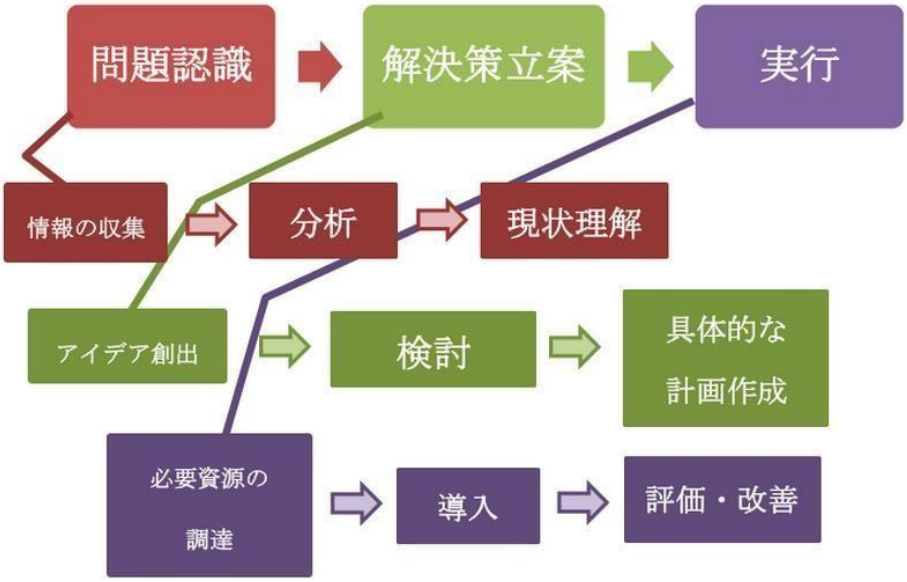
【仮説を証明するために】

仮説に関しては、JICA の「Capacity Assessment Handbook」に基づいて作成しました。これによると、問題解決能力は大きく３つに分けられ、さらに各過程があると考えています。そのため、住民の能力が発揮されているかどうか、またその能力を発揮できなくしていた要因が何かを各段階で検証していきます。

・問題認識:情報収集→分析→現状理解

・解決策立案：アイディア創出→検討→具体的な計画作成

・実行：必要資源の調達→導入→評価・改善




## 教育班の PJ による仮説の検証

パライにおけるかつての支援は、ニーズを調査→FEST がニーズをみたすためのプロジェクトを立案→住民が参加し、実施 という流れでした。特に教育プロジェクトについては、まずこの仮説が設定される以前からあったプロジェクトであるため、そのやり方やアプローチが直接この仮説の立証と重ならない部分があるということをあらかじめ述べておきます。特にプロジェクトの立案や設計に関してはFEST が行ってそれに対して住民からアドバイスをもらうという形式をとっていること、また最終的に現在は支援地住民ではなく外部のフィリピン大学生と連携して行っているため住民が必ずしもメインの協力者であるとはいえないこと、が仮説の立証とは違うベクトルでプロジェクトの運営を行っている点であります。

しかし、そもそもこのプロジェクトも住民へのプロジェクトの中心的役割の移譲というのが目的とされており、その背景には住民自身でプロジェクトを回せるだけの能力があることを前提にしています。従って、これまでのプロジェクトを振り返りその中で住民がどう行動し、関わってきたかを振り返って

検証の材料とするのは非常に意義があると考えました。

また、奨学金 PJ に関しても今回、現地への還元の最大化ということに焦点を置いており、今夏から始まった PJ でもあることから検証がそもそもできない項目、検証がまだ終了していない項目というものも存在しています。

それを踏まえたうえで、以下にその内容を記します。

【結論】

・問題認識について

まず教育に問題があると感じる親は多かったので認識はしていていました。そもそも我々がプロジェクトを起こしたのは住民集会での意見収集によるものだったのでそう言えます。

しかし、まずそういう場所を作らなければ住民から動くことがないこと、そしてそのことについて何か情報を集めるなど自らアクションを起こす人がいないことは間違いありません。もちろん自身の問題について何が原因なのかはそれぞれの家庭が意見として持っていましたが、それはお金や学習用のマテリアル不足というのが大半で、そこから更に掘り下げて理由を探るような人物は見受けられませんでした。

結果、FEST 側がプロジェクト案を出し、その中で行動するかしないか、という流れしかありませんでした。これは教育という問題が身近ではあるが緊急性の高い問題ではない、というのが作用していたと考えられます。

また、今回の奨学金 PJ を行うことになった背景として tutorial class PJ でアプローチしていた学力不足が、学歴が向上しないことの直接的な原因でないことが調査でわかりました。ここから、問題認識の原因に対する把握が不十分であったと考えられます。

・解決策立案

この部分はほぼ FEST 主導だったと言えます。一部、パライ説明の項目にも記載していた現地協力者 Rheswi からプロジェクトに関するアイディアが出た場面がありましたが、それ以外は特にあがることはなく、そしてあがったものも計画を立てるということは特になく本当にただのアイディアの段階でそれを FEST 側が形にするというのが実情でした。ただ、基本的にプロジェクトをやる際には多くの住民から意見を集めて反映させるという形にしていましたが、そのときは本当に多くの意見が寄せられていたので現状のプロジェクトの様子を見て検討する力は十分にあると考えられます。

奨学金 PJ に関してはこの解決策立案の部分を FEST が主導で行っているため、検証不可となっています。

・実行

教育の中で一度 Rheswi がメインでプロジェクトを動かした際に彼女自身で教材を集めるというアクションが行われました。そしてそれを導入し、また工夫をしてという事を繰り返し行っていました。実際のところ、そのプロジェクト自体は彼女が忙しくなり、消滅してしまいましたが、このチャートに沿ったアクションが出来る人がいるのは間違いありません。それ以降についても Chona が住民に声掛けを

行い、参加を促すなど実際に動く人はいましたが、そうでない人の方が多いのは事実です。この点に関しては、FEST が主導でやるという形が定着したこと、教育に関しては問題意識の程度にかなりの違いがあること、が原因と考察しています。

また、奨学金 PJ に関しては、集会において不足している情報の指摘があったことから、評価・改善する部分に関しては個人による差異はあれ、その能力を有していると考えられます。しかしながら、必要なリソースの調達に関しては奨学金の誤った情報を思い込んでしまっている住民が多く見受けられ、ここに関しては複数の情報リソースから情報を収集し、信ぴょう性を判断するという部分が不足していると考えられます。

## Relocation Project による仮説の検証

支援概要

２０１４年夏

・ニーズ調査 ⇒リロケーション・洪水対策・デモリション対策

↓

２０１５年春

・Relocation をしたいか川・道路側１６人にアンケートを取る

⇒回答した住民全員がリロケーションを望む（外部と繋げることに賛成しない人もいる）

・FEST による Relocation のための情報収集

↓

２０１５年夏

最大目標：川・道路それぞれ文書を残す

・夏渡航中 住民にＦＥＳＴが目に見える成果を出していないと不信感を伝えられる

⇒住民への還元を最優先するべく最大目標を再検討

最大目標：

公有地―外部機関と繋げる（Initial meeting の実施）

私有地―文書化

結論としては、＜問題認識＞は住民でできており、その次の段階である＜解決策立案＞の（アイディア創出）までが検証されたと結論付けました。

その根拠は、

①２０１４年夏に住民が洪水やデモリションの問題解決をニーズとして提示していること、

②住民は川沿い３m以内が住んではいけない場所だということをしっていること。また、パライの土地であり過去にデモリションが起きた経緯も知っている。【情報収集】

③②を踏まえ、川沿い、道路沿いの住民それぞれが洪水やデモリションの危険があることを分かっている【分析】【現状理解】

④その解決方法としてリロケーションがあるということを知っている【アイディア創出】

※しかし、【検討】の段階でお金がない、リロケーション先がないと諦めてしまっている様子が見受けられ、それが検討をする前からの諦めなのか検討をしたから諦めているのか分かりかね、検証不可となり

ました。
　いずれにしろ、ここでＦＥＳＴが住民の問題解決能力を補いニーズを満たすために出来ることは【検討】をするための情報収集と住民への共有であり、それに基づいて【具体的な計画作成】を行い、＜実行＞のステップまで進めることであると考えています。

　しかし、ＦＥＳＴが主導した結果
・情報収集と情報共有を行い住民に相談する【検討】
・最善だと思われる機関との提携を目標に動きを考える【具体的な計画作成】
・最善だと思われる機関の情報収集【必要資源の調達】
・最善だと思われる機関に繋げる【導入】
については、能力の検証が不可であると考えています。
　加えて、
・ＦＥＳＴの関与が与えた影響
・実施されたプロジェクトが住民の問題解決に好インパクトを与えているか
・ＦＥＳＴの関与を完全になくした状態で２０１４夏時点でのニーズを満たせるか
に関してはまだ測定の段階ではありません。今後の支援を通して検証をしていきます。

Job Project

支援の概要
２０１４年夏
・ニーズ調査⇒生計向上
↓
２０１５年春
・ミーティング：生計向上の手段 住民は雇用より職業訓練よりスモールビジネスを望み、いくつか案を出すもお金がないと諦める→マイクロファイナンス
外部訪問や住民の要望からＦＥＳＴマイクロファイナンス案
↓
国内
・改めてリスクを調べる＋セブの職業訓練の制度が整っている（サーティフィケーション等）
　⇒安定さを考えても雇用の方がいいのでは？
↓
２０１５年夏
・職業訓練について情報収集
・職業訓練を望む人を訓練所と直接つなげる

　これまでの活動を通じて、私たちは住民は＜問題認識＞、＜解決策立案＞の検討までは達成していると言えます。

その根拠は、

①学費や生活費が十分でないことを実感している人や自分の貧しさについて口にする人が多い。これにより住民は学費や物価という情報を基準に自分たちの現状を把握しているのではないかと想定する。
【情報収集】　【分析】　【現状理解】
②ミーティングにて住民自身でスモールビジネスという選択肢を選び、具体案をいくつか出したうえで可否を話し合っていた。　【アイディア創出】　【検討】
しかし、【具体的な計画作成】にうつるに当たってお金がないと諦めてしまった
⇒資金不足であることを外部要因と捉え、ＦＥＳＴがその不足を補いニーズを満たす
・【具体的な計画作成】【必要資源の調達】をするための資金問題の解決
（＝マイクロファイナンス）
→無謀な計画であるため、【アイデア創出】まで戻り職業訓練を希望者に対し斡旋することとした。

また、Relocation Project と同様に
・ＦＥＳＴの関与が与えた影響
・実施されたプロジェクトが住民の問題解決に好インパクトを与えているか
・ＦＥＳＴの関与を完全になくした状態で２０１４夏時点でのニーズを満たせるか
に関してはまだ測定の段階ではないと判断しています。

# 支援活動

## 対象地域：ピナハボン

February.27～March.30/August.7～September.7

フィリピン共和国 マンダウエ市 スバンダク地区 ピナハボン

(Pinahagbong)

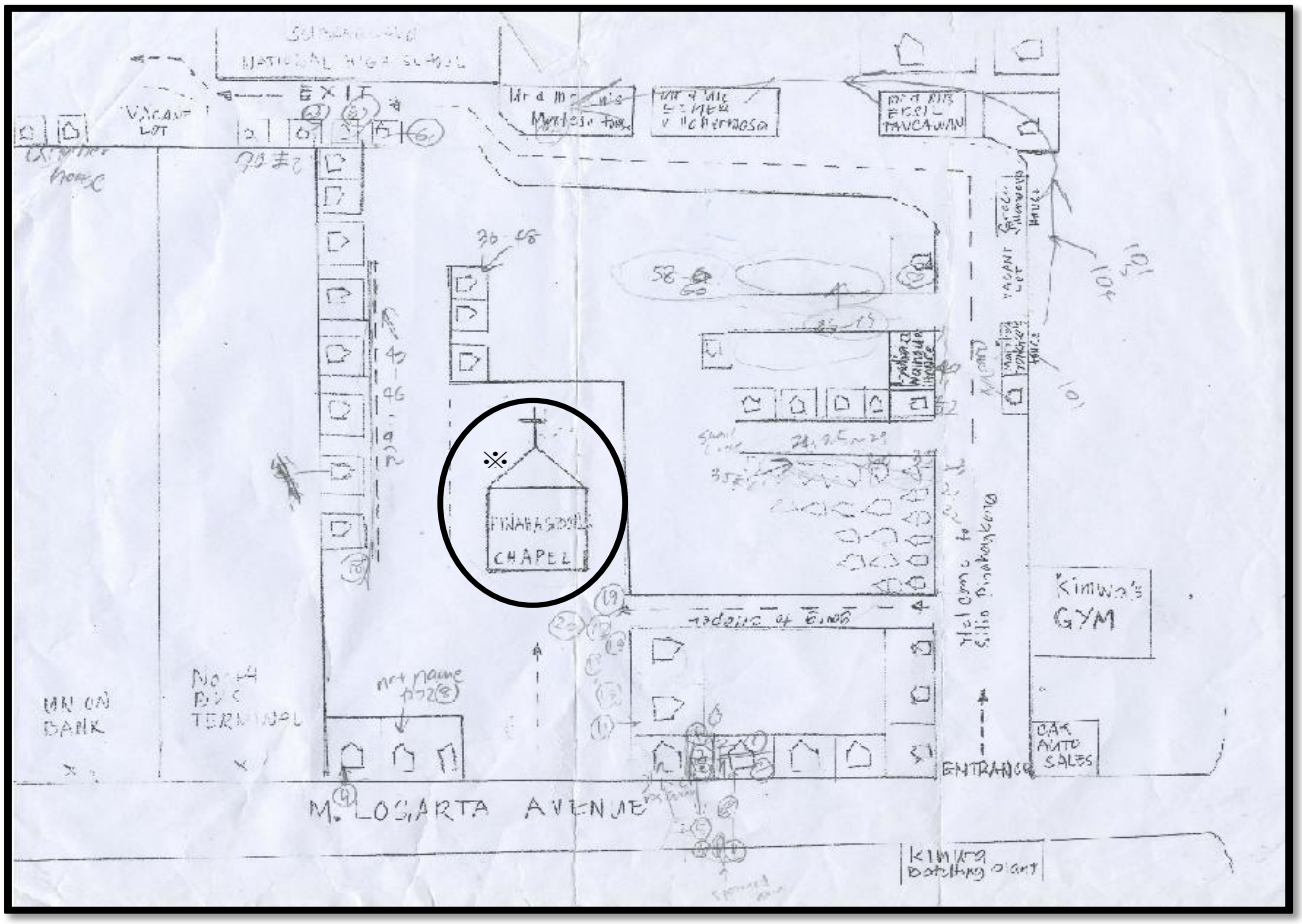
# PINAHAGBONG's HISTORY

| | |
|---|---|
| 2013年夏 | 新渡航地班の初渡航 |
| | ピナハボンを支援地に決定 |
| | 現地組織「FEST-PINAHAGBONG」設立、オフィサー選挙 |
| | 「Water Supply Project」実施決定 |
| 2013年夏<br>～<br>2014年春 | 水道建設のための資金集め開始 |
| | クラウドファンディングを実施するも失敗 |
| | ソニーマーケティングボランティアファンドから25万円の協賛を頂く |
| 2014年春 | 水道建設会社に何度か訪問し、手続き・金額の確認・調整 |
| | 現地組織による住民からの水道建設資金の回収 |
| | 水道建設資金の支払い |
| 2014年夏 | 水道建設の大幅な遅れの原因調査 |
| | 現地組織「FEST-PINAHAGBONG」のオフィサー改選 |
| 2015年春 | 水道建設工事の進捗具合の調査 |
| | 「Water Supply Project」の利益を循環させる「ファンドプロジェクト」への意識調査 |
| 2015年夏 | 水道建設工事完了の確認 |
| | 「Water Supply Project」完了 |
| | FEST-JAPANが次回で撤退することの発表 |
| | 現地組織「FEST-PINAHAGBONG」のオフィサー改選 |
| 2016年春<br>(予定) | PINAHAGBONGの状況確認 |
| | 最後のあいさつ |
| | 撤退 |

## 1. 支援地紹介

大型ショッピングモールへ続く大通りに面した場所にあり、2013 年での夏渡航で支援地探しを開始しピナハボンを支援することに決定しました。

現地の規模として人口は約 480 人、世帯数は 78 世帯ほどです。また、カトリックを信教している人が多くいます。




※集会等が行われるチャペル

ピナハボンにはノースバスターミナルとスバンダクナショナルハイスクールが隣接していて、その他は空き地や工場に囲まれています。

ピナハボンのコミュニティーエリアは近親者同士の結びつきによって形成され、「フロントサイド」と「バックサイド」に分かれているが、コミュニティー同士が全く協力しないということではなく関係が完全に断絶しているわけではありません。

(支援地内部の様子)

## 2. ピナハボンにおける現地組織について

ピナハボン班では、現地住民の能力が発揮されるためには現地でプロジェクトを中心となって行っていく現地組織＝オフィサーが必要であると考えています。FEST は 2013 年夏に最初となるオフィサー選挙を行い、代表・副代表・監査・経理・秘書の５役職のオフィサーを選びました。

～全体における仕事内容～
・FEST との情報交換
・現地における資金循環システムの構築と管理
・Facebook ページの管理
・情報共有のための集会の開催

～各々の役割～
・代表…オフィサーミーティングや集会で全体を統括する。
・副代表…代表のサポートを行う。
・経理…プロジェクト実施における資金の管理を行う。
・秘書…オフィサーミーティングや集会で話し合ったことの記録を行う。
・監査…オフィサーがそれぞれの役職の役目を果たしているか確認する。

(オフィサーとミーティングの様子)

～選挙方法～
１家庭１票ずつの投票権を与え、推薦された候補者に投票。
しかし、特定の一族が権力を握る状態を防ぐため、三等親以内の親族が同時期のオフィサー内にいないという条件をつけ、選挙を行いました。

～オフィサーの条件～
FEST とオフィサーの間の協力関係が築けるよう、また、現地だけでもオフィサー組織が動かせるよう、2014 年夏の選挙にてオフィサー役員を推薦する際に以下の条件を提示しました。
・オフィサーの仕事を行う時間的余裕があること
・FEST のプロジェクトに興味があり、信頼をしていること
・英語を話すことができること
・Facebook アカウントを持っていること
・ピナハボンの状況を改善したいという意思があること

## 3. 支援内容

2013 年夏渡航、私たちはピナハボンを支援地として決定し、支援を開始致しました。私たちが支援を開始して最初に行ったことは、住民が「自分たちの課題とその原因、そしてそれらに対する解決策」を話し合い、案を出し合うための集会でした。

次に、いくつか挙げられた問題のうち、どの問題にアプローチするのかを住民による投票で決定しました。その結果、ピナハボンにおいては水道の整備に取り組むことに決定しました。理由は、当時現地住民のうち数家庭が水道を保有しており、それらの家庭が水道を保有していない家庭に水を販売している状態であり、水道を持っている家庭は水道代に利益分を上乗せして販売していたため、水道を保有していない家庭は通常よりも高い値段で水を買わざるを得ないという問題がおきていたためです。

住民たちの集会の様子

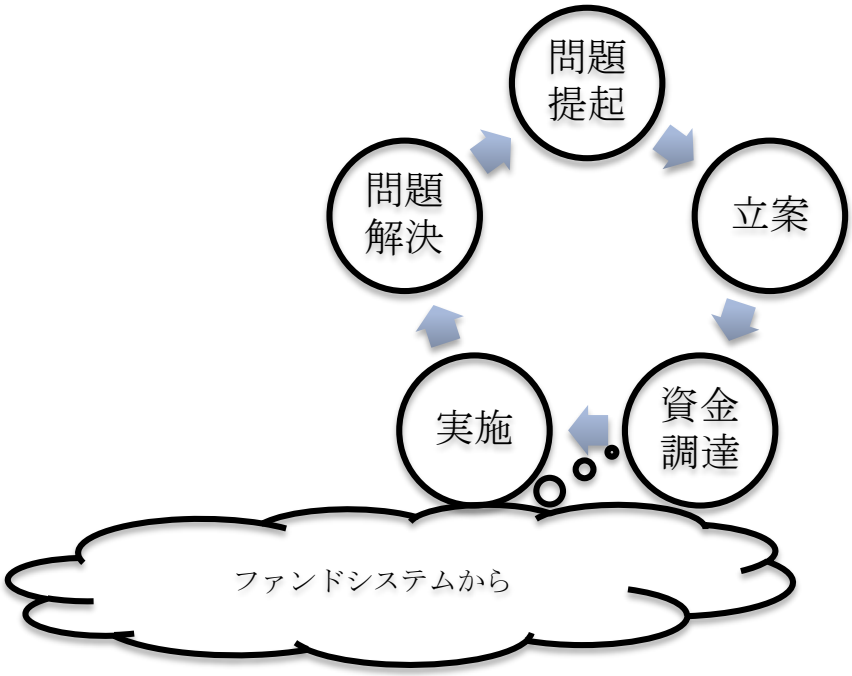
また、FEST からの提案により、水道の完成によって浮いた額を集め、今後のプロジェクトに利用していくことを長期的な目標として設定しました。

FEST としては、以下の二点を支援のゴールとして定めています。

① **プロジェクト立案**

FEST の協力がなくとも、オフィサーを中心として
現地が必要なときに適切なプロジェクトを立案・実行し、
ロールモデルをまわすことが出来る状態。

<ロールモデル>



② ファンドシステム

定期的にプロジェクトに必要な資金が集められ、その必要に応じて資金を利用することが出来る状態。

＜これまでの支援実施項目＞

① 水道・ファンドプロジェクト(2013 夏～2015 夏)
② オフィサー改選(2014 夏・2015 夏)
③ 教育プロジェクト（2014 夏）中止
④ 現地との交流（ワールドカフェ、Picture board、うどん）
⑤ 経過観察への移行(2015 夏)

うち、2015 年春～2015 年夏の渡航にかけて、

① 水道・ファンドプロジェクト
② オフィサー改選
⑤ 経過観察への移行

を行いました。

① 水道・ファンドプロジェクト

水道プロジェクト

2013 年の夏渡航で水道インフラの整備を支援内容とすることが決定し、2014 年春に水道を発注。2015 夏に、水道のメインパイプが完成し、住民は各家庭にサブパイプをつなげ、ピナハボンの家庭に水が届くようになりました。

～発生した問題とその問題に対するアプローチ～

・ 水道工事の遅れ

本来ならば 2014 年夏には完成していたはずのメインパイプが、2014 年夏、さらには 2015 年春になっても完成していませんでした。

→まずは遅れている原因を調べるため、現地のオフィサーと共に水道建設会社を訪問し、担当の方に話を伺いました。結果、人手が足りていないこと、地盤が固いこと、建設に必要な機材が不足していることが原因で工事が遅れていることが判明しました。次に今後どのように動いていく予定なのかを尋ね、今後の建設の予定を集会で現地の住民と共有しました。また、FEST としては現地の水道建設会社をオフィサーとともに訪問し、建設完了の時期を早めるよう交渉しました。

・ 家庭による出資額の差

水道建設会社が提示してきた、水道を契約できる最大の家庭数は 64 家庭でした。そのため 64 家庭が水道プロジェクトに参加することを想定し、発注に向けて資金の準備を行ってきました。しかし、発注する時点では参加家庭が 64 家庭に満たなかったため、不足分の家庭の建設費用を比較的裕福な家庭が分担して払うことになりました。結果家庭によって出資額に差が出てしまいました。

→2014 年春以降に水道プロジェクトに参加した家庭が多くあり、それらの家庭から建設費用を徴収することが出来たため、返金に必要なお金を確保することが出来ました。そして、かつての集

会で「比較的裕福な家庭が不足分の家庭の建設費用を負担する」と決まった時に作成した、「どの家庭がどれくらいの額を多く負担しているか」が書かれたリストがあったため、そのリストをもとに住民に返金を行いました。現在ピナハボンの家庭による出資額の差はありません。

ファンドプロジェクト

2014 年夏、FEST から現地にファンドシステムの構築を提案しました。すると 2015 年春渡航で、現地オフィサーからファンドシステムの案が提出されたため、その案を元に細かいルールを策定する為の準備（現地住民へのアンケート、オフィサーとのミーティング）を行いました。2015 年夏渡航にて細かいルールまで策定されたファンドシステムが構築され、今年 9 月からお金の徴収をはじめます。

・ ファンドシステム
オフィサーから提出された案は、かつて FEST が水道発注の時に提供した 93,000php 分の額を、水道プロジェクトに参加している 54 家庭で割り、毎月 20php ずつ集め、資金が確保された時点で次のプロジェクトを行うというものでした。現地オフィサーの中で、この案に関しての共有だけでなくリスク管理まで行われており、FEST 側は、この案に問題は無いと判断し、実行にうつしました。

② オフィサーの改選

2014 年夏渡航で選んだ新たなオフィサーのうち、代表と副代表が、病や出稼ぎといった理由で退職するため、オフィサーの「代表・副代表・監査・経理・秘書」の五役職のうち、新たな代表と副代表を選挙によって選出しました。

方法は今までと変わらず推薦・選挙式でしたが、今まで FEST が主導してきた選挙の全過程を、住民のみで行いました。

今回の渡航から「現地にはなるべく介入をしない」というスタンスをとっていた FEST からは特に働きかけず、現地に全て任せる形にしました。そこで現地の住民だけで今後のオフィサーをどうするか話し合った後、新たに代表と副代表を選ぶべきだという結論になり、選挙にて新たなオフィサーを選びました。

FEST は今渡航から経過観察へと移行し、現地から何か相談が無い限り、介入を行わないスタンスを

(オフィサー改選時の様子)

とっています。今後は、今までとは違い客観的に現地の様子を見られるようになったため、第三者の視点からオフィサーの動きを観察していく予定です。

⑤ 経過観察への移行

今回の渡航で水道プロジェクトが完結することから、現地の住民に「今後 FEST は経過観察に移るということ、つまり今回の渡航からは、こちらから介入することはしないということ」を伝えました。当初は、いきなり自分たちだけでプロジェクトを行うことは不安だ。という意見がきかれました。FEST は今回の渡航の間協力やアドバイスを行うため、いきなり居なくなるわけではないということを説明した所、自分たちだけの力で今後プロジェクトを行っていくという意思表示をしてくれました。そして実際にオフィサーの改選からファンドシステムのルール策定まで、FEST の介入を必要とせず自分たちの力で完遂しました。

(住民たちによる排水溝掃除の様子)

また、同じ集会で「今後どのようなプロジェクトを行っていくか」を住民のみで話し合いました。結果、排水整備が次のプロジェクトとして決定され、早速集会終了後に排水溝の清掃を住民が力を合わせて行いました。今後ファンドシステムによってプロジェクトに必要な資金が確保され次第、排水整備の次のプロジェクトを始動する予定です。

現在ピナハボンは住民自身の力で動き出しています。今後どのように動いていくのか、次回の春渡航まで経過観察を続けていく予定です。

## 4. Water supply project

①「Water Supply Project(PJ)」とは

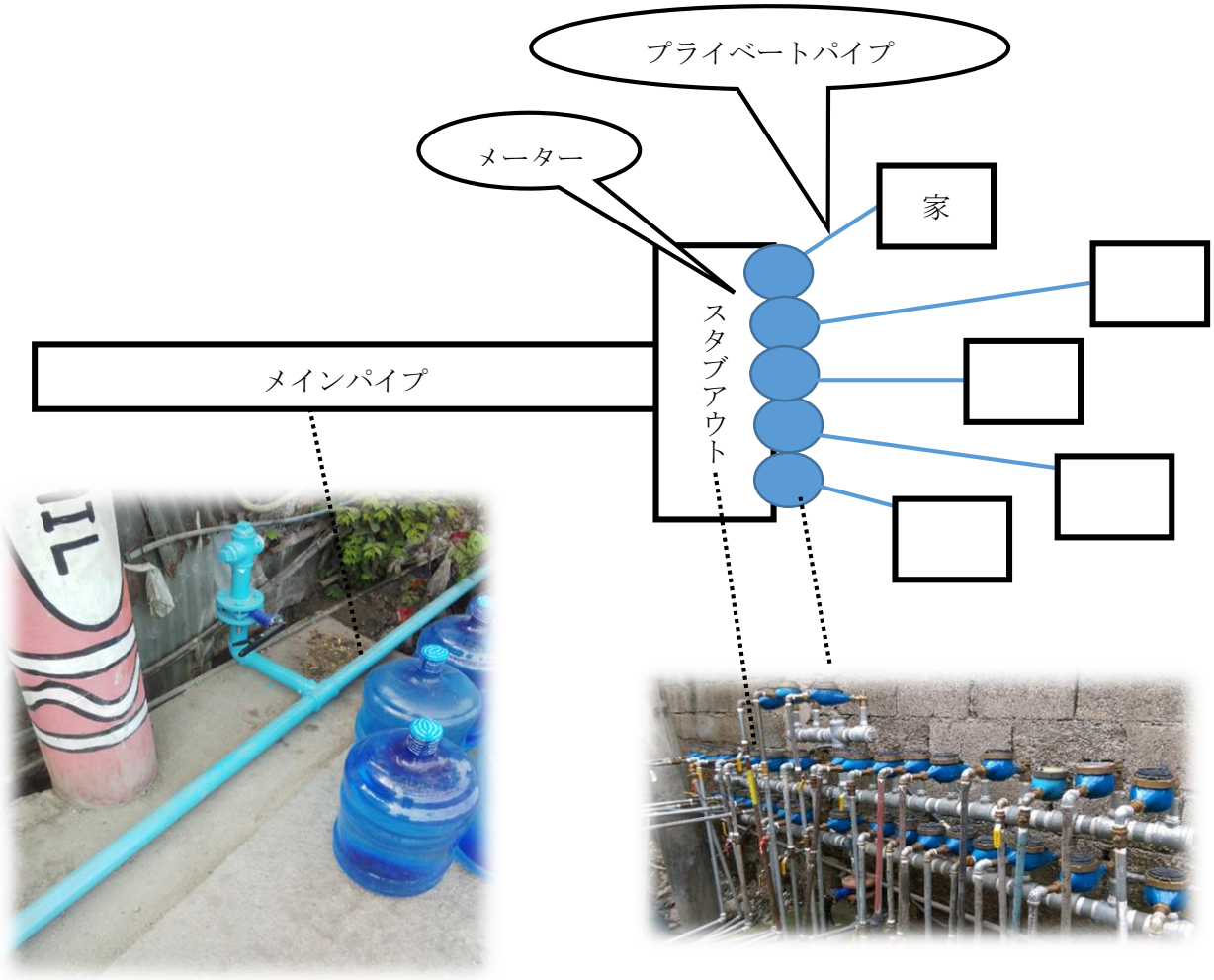
・なぜ水道建設をすることになったのか？

ピナハボン内には水道を所有している家庭が 78 家庭中 5 家庭しかなく、他の住民が水を買う際には、自分で水道を所有したときよりも高い値段でそれらの家庭から購入しなければなりませんでした。生活に必要な水を買う度にお金がかかり、経済を圧迫していました。また重い水を運ばなければならないこと、さらに 5 家庭の水道も老朽化してきていることから、住民は水道を建設することが現状最優先すべき課題だと考えました。

・概要

フィリピンのセブ島には MCWD(Metropolitan Cebu Water District)と呼ばれる水道建設会社があり、そちらに水道建設に必要な金額を支払い、ピナハボンの近くにある小学校から太い水道(メインパイプ)を引いてきて、ピナハボンに公共の水道を作るというプロジェクトです。

〈水道建設のイメージ図〉




②実際の流れ

(1)「Water Supply PJ」実施決定(2013.8)

(2)費用集め・支払いの後、水道建設工事開始(2014.3)

(3)水道建設工事の遅れ(2014.4～2015.5)

(4)工事完了後、住民によってPrivate Pipe設置(2015.6)

(5)「Water Supply PJ」完了(2015.8)

⑴「Water Supply PJ」実施決定(2013.8)

2013年8月、スバンダクバランガイ(Subangdaku Barangay)に訪問しピナハボンを紹介されたのが、FEST とピナハボンの最初の出会いでした。そして調査の後、ピナハボンを新支援地と決定しました。支援地と決まってから、まず初めに私たちが行ったことは、住民たちがどの問題を解決すべきだと考えているのかを把握することでした。そのために集会を開き、住民たちにピナハボンの問題について考えてもらいました。そこでいくつか出た問題の中から、最も先に解決すべきだと思う問題に投票してもらいました。その結果は水道(26 票)、教育(20 票)、排水(11 票)、生計(5 票)、栄養失調(2 票)だったので、「Water Supply PJ」を実施することが決定しました。

さらに「Water Supply PJ」を主導し、FEST と連絡を取り合う協力者の組織「FEST-PINAHAGBONG」の設立、水道建設会社への訪問を行いました。最後に今後の展望についても話し合い、次に FEST がフィリピンにやってくるまでに資金を互いに集めることを約束して、初渡航は終了しました。

(取り組むべき問題の投票を行う様子)

(Water Supply PJ の詳細を話し合う FEST メンバーとピナハボンの住民達)

⑵費用集め・支払いの後、水道建設工事開始(2014.3)

夏渡航が終わり、次の春渡航までに水道建設費用を回収しなければなりませんでした。FEST の出資金は 80,000.00 ペソ(約 20 万円)という大金であったので、資金集めの方法を検討し、そしてクラウドファンディングへの応募、そして各種助成金への申請をすることにしました。結果として SONY マーケティングボランティアファンド様から助成金を頂き、FEST が担当した額の資金集めは達成することができました。現地では FEST-PINAHAGBONG のオフィサーが Water Supply Project への参加者を募り、参加家庭から費用を回収しました。

そして 2014 年 3 月にピナハボンへ再び訪れました。予定では FEST が国内で集めたお金と、オフィサーが現地で集めたお金で、水道建設会社に費用を支払うことになっていましたが、しかし…

現地に訪れてみると、以下の 3 つの問題が発生していました

**①水道建設にかかる費用の見積もりの増額**

**②プロジェクトへの参加家庭が必要な数より少なく、費用が足りない**

**③オフィサーからの情報共有が少ないという住民からの不満**

FEST はこれらの問題への対処が早急に必要であると判断し、まずは情報収集をし、オフィサーと共に対策を練りました。

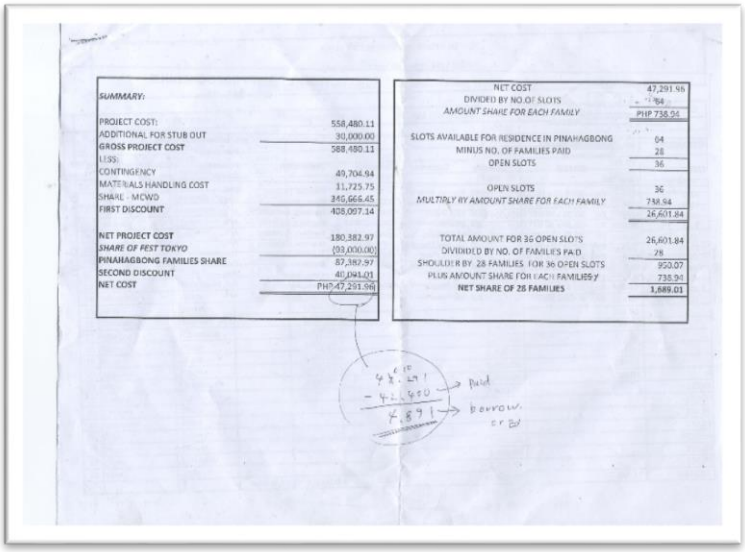
**①水道建設会社を訪問し、値上がりの原因を調査**

水道建設の請求額について正確な情報を入手するために、オフィサーと共に水道建設会社を訪問し担当者に話を伺いました。金額の増額については、予定されていた割引が行われていない、プロジェクト参加者数が 2 倍近く多く見積もられている、工事に必要な資材が値上がりしたという原因が挙がり、その後交渉の結果、適正な金額にすることができました。

（水道建設会社への訪問）

**②比較的裕福な家庭が一時的に負担**

水道建設会社に建設を依頼したところ、ピナハボンに水道を配備するには最低でも 64 家庭の参加が必要でした。しかし、必要数 64 家庭のうち、プロジェクトへの参加は 46 家庭に留まりました。早期の支払いにより建設費の割引が適用されるため、対応策を住民間で協議、割引の有効期限までに参加家庭を集めるのは難しいと判断し、19 家庭分の不足額を経済的に余裕のある家庭が立て替えることを決定しました。その結果 2014 年 3 月末に水道の発注が完了しました。発注後も新たにプロジェクトへの参加、出資を受け付け、そこから資金を立て替えた家庭に返済していくことになりました。



| SUMMARY: | |
|---|---|
| PROJECT COST: | 558,480.11 |
| ADDITIONAL FOR STUB OUT | 30,000.00 |
| GROSS PROJECT COST | 588,480.11 |
| LESS: | |
| CONTINGENCY | 49,704.94 |
| MATERIALS HANDLING COST | 11,725.75 |
| SHARE - MCWD | 346,666.45 |
| FIRST DISCOUNT | 408,097.14 |
| NET PROJECT COST | 180,382.97 |
| SHARE OF FEST TOKYO | (93,000.00) |
| PINAHAGBONG FAMILIES SHARE | 87,382.97 |
| SECOND DISCOUNT | 40,091.01 |
| NET COST | PHP 47,291.96 |

| | |
|---|---|
| NET COST | 47,291.96 |
| DIVIDED BY NO.OF SLOTS | 64 |
| AMOUNT SHARE FOR EACH FAMILY | PHP 738.94 |
| SLOTS AVAILABLE FOR RESIDENCE IN PINAHAGBONG | 64 |
| MINUS NO. OF FAMILIES PAID | 28 |
| OPEN SLOTS | 36 |
| OPEN SLOTS | 36 |
| MULTIPLY BY AMOUNT SHARE FOR EACH FAMILY | 738.94 |
| | 26,601.84 |
| TOTAL AMOUNT FOR 36 OPEN SLOTS | 26,601.84 |
| DIVIDIDED BY NO. OF FAMILIES PAID | 28 |
| SHOULDER BY 28 FAMILIES FOR 36 OPEN SLOTS | 950.07 |
| PLUS AMOUNT SHARE FOR EACH FAMILIES y | 738.94 |
| NET SHARE OF 28 FAMILIES | 1,689.01 |

(集会で配られた水道建設費用の説明書)

**③情報共有の機会と掲示板の設置**

仕事の休みが日曜日という人がほとんどなので、毎週日曜日に最新の情報共有を行うということになりました。またピナハボン内の人がよく通る場所に掲示板を設置し、情報共有を行いやすくするようにしました。

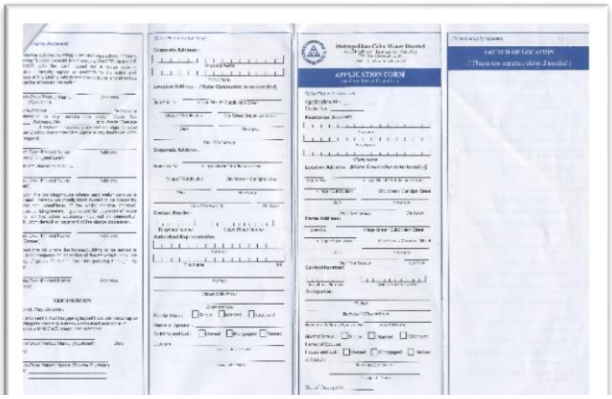
結果として問題を解決し、水道建設費用を支払うこともできました。後は水道建設費用を立て替えている家庭へ過払い金を返し、水道建設工事の完了を待つだけとなりました。

水道建設に必要となった金額

・建設に必要な金額 180382.97 ペソ（約 50 万円）

・FEST からの出資額 93000.00 ペソ(約 25 万円)

・現地からの出資額 87382.97 ペソ（約 23 万円）



(参加家庭が提出する水道の建設および使用申請用紙の一部)

**⑷水道建設工事の遅れ(2014.4～2015.5)**

2014 年 8 月、予定では 2,3 ヶ月で完成予定であった水道について何の報告もされないまま、ピナハボンに訪れました。すると…

**①水道建設工事が大幅に遅れている**

**②プロジェクトへ新たに参加する家庭が現れず、立て替え分の返済が進んでいない**

という問題が発生していることが分かりました。

そこで水道建設会社への訪問、工事現場スタッフへのインタビュー、そしてフィリピン、セブ島で水道関連事業を行っている現地 NGO への訪問を行って、工事が遅れている原因や対策を伺いました。また集会を開いて、立て替え分の返済が進んでいない問題をどうするか、オフィサーと住民間で議論をしました。

**①水道建設工事の遅れの原因調査**

□水道建設会社と工事現場スタッフから得た情報

・大きな機械が壊れていて、小さな機械で代用しているため

・人手不足でスタッフが週末にしか働けないため

・地盤が想像以上に固いため。

・完成予定日：遅くとも 9 月下旬、可能であれば 8 月中

(工事現場の様子)

□現地 NGO の原因分析とアドバイス

・原因分析

最初に水道工事の代金をすべて支払ってしまったことが、水道建設会社側からプレッシャーを取り除いてしまったことも関係している可能性があるという指摘を受けました。

現地では建設代金を一括ではなく建設工事の進捗に応じて何回かに分割して払うことが通例となっていることが判明し、実施前の調査不足が反省されました。

・アドバイス（今後の対応について）

着工後行える対応として、水道建設会社に工事にあたるスタッフを増員するように要請することが挙げられました。現地組織のオフィサーに伝達し、必要であれば彼らから行える状態にしました。

**②費用を立て替えた分の返済手段をオフィサー、住民で議論**

返済に充てる資金の元手を、「新規参加者の出資分」から「現在参加している家庭で平等に負担」に変更しました。住民と現地住民で議論した結果、過払い家庭への返済は早急に対処すべき事案だと認められました。そのため新たな家庭のプロジェクトへの参加(出資)を待つのではなく、現在いる参加家庭で不足額を返済することに決定。不足額は各家庭に等分され、現地組織の経理担当者が回収、管理、返済を行います。

(オフィサーから経理状況の共有をうける住民の様子)

**⑷工事完了後、住民によって Private Pipe 設置(2015.6)**

2015 年 5 月に現地住民から数枚の写真が Facebook のグループページに投稿されました。それは、ついに水道建設　工事が完了し、住民が各個人の家までのパイプを引いている写真でした。元々の完了予定時期から大幅に遅れてしまいましたが、2015 年 6 月にはプロジェクト参加家庭のほとんどの家に水道が引かれ、水道を利用することができるようになりました。

(メーターからパイプを引く作業をする様子)

⑸「Water Supply PJ」完了（2015.8）

2015 年 8 月、FEST がピナハボンに訪れ、水道の完成とプロジェクト参加家庭間の支払額の差の解消を確認しました。また水道が完成し、水が蛇口から出ていることを実際に目にしたことで、新たにプロジェクトに参加する家庭も増えていました。オフィサーが最終的な報告書をまとめてくれていたので、そちらを確認させてもらい、特に問題がなかったので、「Water Supply Project」は完了しました。

（完成した水道から水が流れることを確認しました）

## 5. 今後の展望

水道プロジェクトが完結したため、2015 年夏渡航にて現地の住民に対し 2016 年春渡航にて撤退すること、今渡航では FEST からあまり介入することはしないということを伝えました。
住民からは「FEST がいないと不安だ。」という意見が挙げられましたが、あまり介入はしないがアドバイスや協力は行うということを説明した結果、最終的に住民も納得し自分たちだけでプロジェクトを行なっていくという意思表示をしてくれました。

よって今後は住民たちがどう動いていくのか次回の春渡航まで経過観察を続けていく予定です。

## 6. 仮説

ピナハボンでは以下の仮説を持ち活動しています。
〈仮説〉

社会的・経済的非受益者が問題を解決するために十分な能力を持っているが、それが発揮されていないのは、行動契機の不足、社会的抑圧、組織体制の欠落、資金不足によるものである。

この仮説をもとに仮説を証明するために掲げる理想の状態である支援方針と検証を行うための具体的な行動指針である検証方針を以下のように掲げ、活動を行ってきました。

支援方針
住民自身の手で生活改善できる

検証方針（どのようにして検証を行うのか）

①初動機会を提供する

　最初に支援地に入った際の共同での集会や選挙等

②初期の資金提供を基にした課題の解決と資金循環システムの構築をする

　SONY 様からの資金提供を元に行われる水道の建設とファンドシステムの構築

③自助組織と共同で、資金運用を伴う問題認識・立案・実行のサイクルを開始する

　ファンドシステムの開始、運用と次のプロジェクトに対する動き出しのサポート

※検証の全段階で、外部要素として FEST が関わり社会的抑圧を緩和する

④理想の状態が達成されたことを確認する

　経過の観察

⑤撤退する

〈支援を通じた仮説の検証結果〉

ピナハボンにおける支援を通して問題を解決するにあたって求められる以下の能力が認められます。

・住民は自らの手で現地組織の選挙を行うことが出来る。（ただし立ち上げることに関しては不明）

・資金集めを住民達の手で行うことが出来、なおかつそれらを管理することが出来る。

・初期資金を提供した所、その他の資金は住民達のみで補うことが出来た。

・行動契機を与えた所、水道建設に向けて中心人物が動くことが出来た。（その他の住民に関しては人それぞれであり、全体としては不明。）

・課題を考える機会を与えた所、現地の住民の大多数のニーズとなる課題が住民達の手で発見された。

一方、今後調べる必要があるものや現段階では能力として不明瞭なものとして以下があげられます。

・住民達だけで外部の協力を得られるか。

・オフィサーのみでミーティングを開けるか。

・現地のみで資金循環のシステムのルールを制定できるか。

・資金を継続的に集めることが出来るか。

・プロジェクトを始動するにあたりリスク管理が出来るか。等

〈総括および今後の展望〉

　来春の渡航にてピナハボンは完全撤退となりますが、仮説の検証の観点から見れば住民の問題解決能力に関しピナハボンのみの事例にて完全に証明することは現状として難しい状況にあり、さらに他の地域の支援を通じた検証が求められます。さらに、今回の検証を通し検証された結果に関しても正確で的確なものとするために複数の事例を通し総合的に判断、検証されたものとする必要があります。ピナハボンの支援においては特に住民の能力を発揮する際に阻害要因となっているものを取り除くことを中心とした支援を行ってきましたが、実際の現場においては問題の解決方法を実施する段階における不十分なリスク管理のサポートといった仮説において定義されたもの以外の阻害要因の排除も行っており、ピナハボンの仮説設定段階において想定できていなかった阻害要因もあったといえます。

　今回の検証結果および事例に関しては今後の支援地における仮説設定において現在のピナハボンの仮

説における阻害要因の段階からさらに一歩踏み込んだ形での阻害要因の定義、ピナハボンにおいて想定できていなかった阻害要因の定義等につながっていくと考えており、１つの成果、検証結果としてのみではなく今後の FEST における支援においても有意味であると考えています。

## 7. 語句説明

・MCWD
メトロポリタンセブウォーターディストリクトの略。セブ内での上下水道工事を担当している水道会社でありピナハボンの水道建設も MCWD が担当している。
・FEST Pinahagbong
2013 年夏に設立されたピナハボン内での課題解決に取り組む組織。
・オフィサー
FEST Pinahagbong の構成員であり、代表、副代表、経理、秘書、監査の５人からなる。・プロジェクト運営の中核を担う。全員が住民からの選挙で選ばれている。
・ファンドシステム
資金循環システムのことであり、かつて FEST が提供した 93,000php 分のお金を各家庭から月に 20php ずつ回収。そうして集めた 93,000php を次のプロジェクトへと活用していく。
企業・NGO 訪問
・MCWD
セブ島内での水道工事全般を請け負う会社であり、国による管轄を受けている会社。ピナハボン内の水道プロジェクトもここに建設を依頼。なにか問題があれば、直接訪問するまたはメールでのやり取りを行っている。
www.mcwd.gov.ph/
・eu et vie
フランスの NGO。フィリピンセブ島内でスクワーターエリアにおける水道建設プロジェクトを行っている。ピナハボンの近くにあるエリアも支援地としている。MCWD での担当者も同じため、FEST のプロジェクトに関し的確なアドバイスをくれる。
http://globalhandwashing.org/ghw-day/activities/ev-water-and-life-philippines-inc

# 支援活動

## 対象地域：KATANGKONGAN Ⅱ

August.7～September.7

目次

1, 新支援地選定にあたった理由と方針
2, 選定の流れ
3, 新支援地紹介
4, 協力者紹介
5, 基本情報
6, 選定における条件
7, 支援地の問題
8, 集会について
9, 今後の展望

## 1, 新支援地選定にあたった理由と方針

現在 FEST ではピナハボン、パライという 2 つの支援地で活動を行っており、ピナハボンでは水道が完成し、住民間でファンドの回収がオフィサー中心に行われているので、撤退することが決まり、これらの経験を活かして新たな段階へ進むべきであると判断しました。これは団体の活性化につながるだけでなく、FEST の理念に関連しても、最良の国際協力の探求という観点から次の支援地を通し仮説の検証、事例をさらに行っていくことは必要です。パライ、ピナハボンにおいての支援の結果においては適宜状況を比較すると共にそれぞれ仮説の検証結果についても比較していきたいと考えています。また、このようなメリットがある中で今夏はピナハボンにおける新支援地選定にかかわったメンバーがいることから経験、ノウハウを生かせることや新支援地に意欲のある新人が入会したことからこのタイミングで新支援地選定を行うことが最適であると考えました。

新支援地の方針

住民に問題解決能力があるという仮説を支援地に持って入り、支援地の現状を把握したうえで考えられる阻害要因を定義し、仮説とします。
阻害要因を定義するにあたり、パライ及びピナハボンでの現状を分析します。
今回の新支援地においても理想状態を「住民自身が自分自身で問題を解決できる」とし、阻害要因の排除と効果的なサポートを行います。またパライ、ピナハボンの支援と比べより FEST の介入の少ない形を作っていくことを目指します。

プロセス

**2, 選定の流れ**

紹介⇒調査⇒承認⇒団体紹介⇒FEST 主体でのディスカッション（住民間での課題の発見）⇒住民中心でのディスカッション（プロジェクトの決定）の流れで行いました。

紹介先候補

- バランガイ

ピナハボン同様にバランガイから紹介してもらう。現地到着後に地図にて危険エリア（カルボン、パシルといった地域）以外のバランガイをリストアップし、訪問しました。

- NGO

NGO 支援を行っている先を紹介してもらいました。また、紹介目的以外にも NGO を訪問し、実際の NGO が支援を行っている地域を何件か視察させてもらい、自分の支援候補地との生活水準についての比較を行う（実際に NGO がどの生活水準にある住民の支援を行っているか）とともに具体的に課題に対しどのような支援方法、アプローチを行っているか、セブ島におけるスクワーターエリアの現状の情報収集等を行いました。

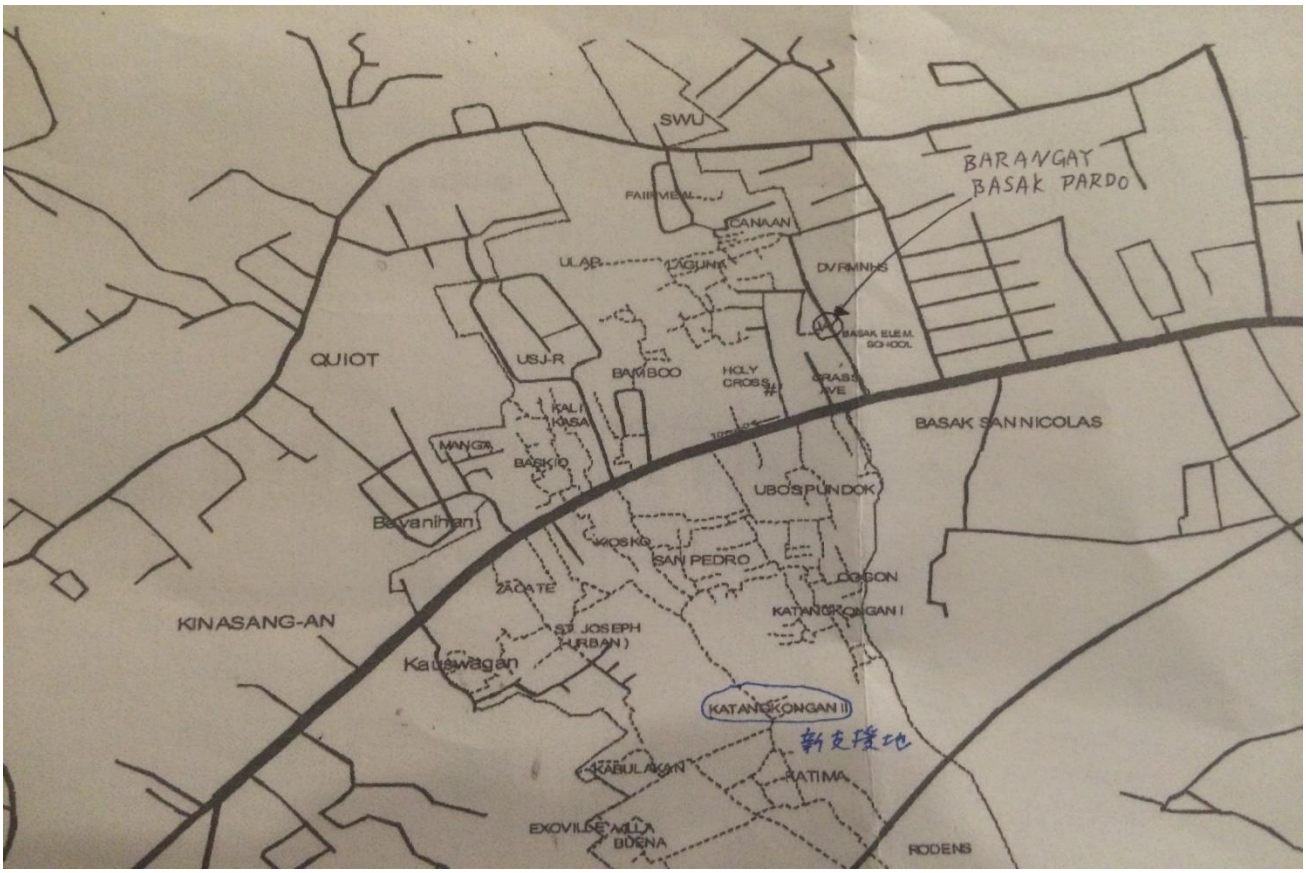
**3, 新支援地紹介**

Barangay：BASAK PARDO

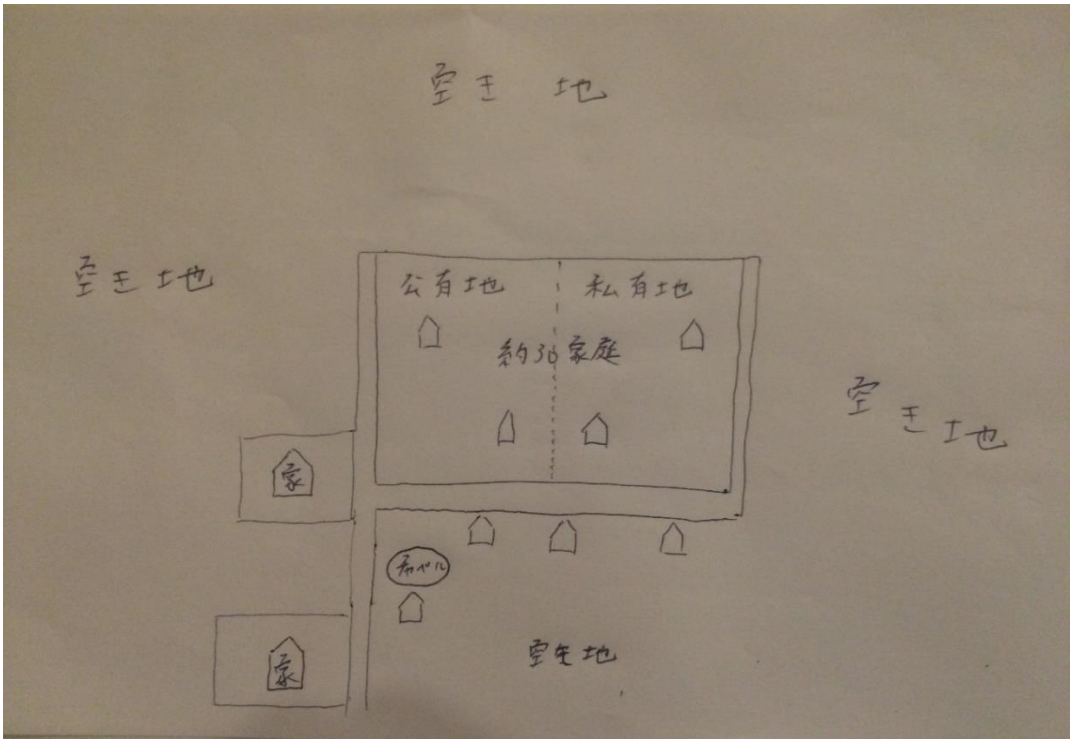
支援地名：KATANGKONGAN Ⅱ

・位置

・バランガイと支援地の位置




・支援地内の地図



## 4，協力者紹介

・60 代女性(Chapel Vice President)

バランガイスタッフに紹介された 60 代女性。FEST にとても協力的でした。

・Mhel montemayor

バランガイスタッフ。支援地に住む 23 歳男性。渡航後も情報共有など FEST の活動に協力してくれています。

## 5, 基本情報

世帯数：41 家庭

人口：200 人程度

土地：アーバンプアーエリア（都市貧困地域）であり、インフォーマルファミリーセクターではない。公有地と私有地、どちらもあり、公有地の住民は毎月 2500php を国に支払い、私有地の住民はオーナーに 400php 支払っている。

組織：チャペル(5 人程度)

生活水準：収入は 200php～。（ピナハボンは 250～300php 程度）

支援地住民の生活の様子、家々を見る限りピナハボン以下、パライ以上の生活水準

## 6, 選定における条件

新支援地班は外部条件と内部条件を定め支援地選定を行いました。

【外部条件】

調査項目【支援地外でバランガイ等に確認】

| |
|---|
| ①ホテルから支援地までの距離 |
| ②支援地外の避難場所 |
| ③支援地周辺の危険性 |
| ④ 近くでお昼を食べられる場所やお手洗いがあると好ましい |

①ホテルから支援地までの距離

タクシーで 20～30 分。料金は 120php。

②支援地外の避難場所

<u>洪水被害がなく、警備員がいる施設</u>

徒歩 6 分のところに University of San Jose Recoletos(サン・ホセ大学 ・ レコルトス)、徒歩 8 分のところにセブンイレブンがあり、どちらも警備員が配置されている。

③支援地周辺の危険性

セブにおける危険エリア（カルボンマーケットやコロン通り、パシルマーケットなど） から半径 1 キロメートル（歩いて向かいにくい距離）は危険区域とみなし、その付近は避ける。

半径 1 キロメートル以内に上記のような危険地域はない。また、Pardo 地域の犯罪件数をみても危険エリアではない。

Pardo 地域の犯罪件数資料（警察署より）

| | MUR | HOM | PH INU | RAPE | total | ROB | THEFT | CARNAPPING | total |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1月 | | | 2 | 2 | 4 | 13 | 12 | 1 | 26 |
| 2月 | | | 1 | | 1 | 14 | 8 | | 22 |
| 3月 | | | 1 | | 1 | 7 | 23 | 2 | 32 |
| 4月 | | | 3 | | 3 | 10 | 25 | 3 | 38 |
| 5月 | | | 4 | 1 | 5 | 16 | 23 | 3 | 42 |
| 6月 | | | 3 | | 3 | 7 | 25 | 1 | 33 |
| 7月 | | | 6 | | 6 | 9 | 17 | 2 | 28 |
| total | 0 | 0 | 20 | 3 | 23 | 76 | 133 | 12 | 221 |

④近くでお昼を食べられる場所やお手洗いがあると好ましい（絶対条件ではない）

大通りからの支援地の入り口からタクシーで 5 分のところに SUPER METRO というスーパーマーケットがあり、中にはフードコートがある。また SUPER METRO の隣にはジョリビー、マクドナルドがある。

【内部条件】

調査項目【支援地内におけるヒアリングもしくは目視にて確認】

**絶対条件（条件が必ず担保されている必要がある）**

①直近のデモリッションのリスクがない

②洪水が頻繁におこらない、起こった際に退避可能

③最低限の生活水準が担保されている（食糧支援といった物資支援の必要がない）

④日本と現地での連絡手段が確保されている

⑤FEST が支援できる規模である

⑥FEST の活動に興味を持っている、協力するつもりがある

⑦緊急時に安全な出入り口があるか安全な集合場所になる場所があるか

状況によって支援可能か不可能かを判断する条件

⑧ NGO の介入がある

⑨コミュニティーの分裂があるか

⑩ 現地組織の有無

①直近のデモリッションのリスクがない

バランガイスタッフ、現地住民からの情報では、KATANGKONGANⅡは公有地、私有地ともに直近ではデモリッションされることはない。

②洪水が頻繁におこらない、起こった際に退避可能

洪水は頻繁には起こらないが、周りが水田であったため水たまりができやすい。

洪水により直ぐに退避できなくなるわけではないが水はけが悪いことから、雨が降り始めたら早目に退避する。

③最低限の生活水準が担保されている（食糧支援といった物資支援の必要がない）

担保されている。土地代 2500php と 400php を住民が支払えていることからも判断できる。

④日本と現地での連絡手段が確保されている

Chapel president , Vice president 共に Facebook のアカウントを持っているので、FEST メンバーとの連絡手段は確保されている。

⑤FEST が支援できる規模である

家庭数は 41 家庭。支援地の規模は、支援地のひとつである、ピナの 1/3～1/4 くらいであり FEST が十分に支援できる規模である。

⑥FEST の活動に興味を持っている、協力するつもりがあるか

Vice president 、その支援地に住むバランガイスタッフ(23 歳男性)共に、FEST の活動にとても大きな興味を持っていた。またバランガイスタッフの方は集会等の際は英語からビサヤ語に翻訳してくれると協力の意向を示していた。

⑦緊急時に安全な出入り口があるか安全な集合場所になる場所があるか

出入り口は 4 つあります。どれも大通りに出られるが、徒歩 6,7 分かかります。支援地までの道（6,7 分）の周りは富裕層のエリアでありコンクリートで舗装されているので安全である。支援地内の集合場所は Chapel 。

状況によって支援可能か不可能かを判断する条件

⑧NGO の介入がある

NGO の介入はない。

⑨コミュニティーの分裂があるか

１つ。公有地と私有地で分かれているがコミュニティーはない。

⑩現地組織の有無

Chapel association がある。

**7, 支援地の問題**

・洪水

排水溝が十分に整備されていないかつ、地質的に水持ちがいいので洪水が一番の問題だと Vice President が言及していました。

・教育

小学校は全員が通うことができているが、高校は支援地の半分ほどです。大学は 4,5 人が通えており、教育物資の不足や授業料が支払えないことが問題です。

・水道

集会では水道の意見が挙がりました。

**8, 集会について**

支援地決定後、支援地内で集会を開きました。

前日にバランガイスタッフとミーティングを行い、集会の広報もしてもらいました。

参加者：23 人。人が少ない原因としては、土曜日に集会を行ったため、仕事などで忙しいという人が多かったため。

形式（ディスカッション）：ワールドカフェ形式

内容：“この地域の理想の姿”、“問題点”、“解決策”の３つについて５グループに分かれ話し合った。

結果：3 グループからは水道、2 グループからは大通りから支援地までの距離が遠いという意見が挙がった。

〇水道

理想の姿…水道があること

問題点…私有地のオーナーから水道を引く許可が下りない、金銭的問題

解決策…私有地のオーナーの許可が必要、誰かのサポートが必要である

〇大通りから支援地までの距離が遠い

理想の姿…大通りの近くに住むこと

問題点…政府が支援してくれない、わからない

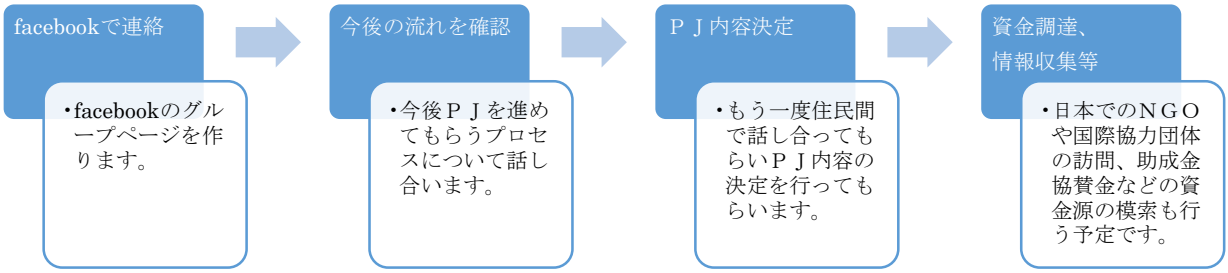
解決策…誰かのサポートが必要である

## 9, 今後の展望

新支援地であるカタンではこれまでのパライやピナハボンの反省を活かした支援を行おうと考えています。今後は、集会で話し合ってもらった理想の姿の実現に向けて、現地の人々が自分たちからアクションを起こしてもらえるようにアドバイスなど行い、現地の人々を主体にしてプロジェクトを進めてもらう予定です。将来的には FEST がいなくても現地のみでプロジェクトが行われていく状態を目標とします。

夏渡航の段階では支援地決定からの時間が短かったため、プロジェクトの内容も最終決定に至りませんでした。今後、集会の時に協力してくれたバランガイスタッフと Facebook を通じて連絡を取り、情報収集を行い、今後の進め方について話し合います。

<u>春渡航までの予定</u>



# フォトワーク事業部

# 合同写真展プロジェクト　『360°』

**立案背景**

写真展『360°』とは多角的視点で現地を捉らえ、そのありのままの姿を紹介したいという思いから生まれた写真展です。私たちが写真を取るときは、例えば「ストリートチルドレンは貧しいはずだ」といった先入観を、気づかないうちに持ってしまっているかもしれません。本当の現地の姿をとるのは、難しいです。そこで、現地の人たちとの会話を通じ聞けたことをそのままキャプションに表したり、実際現地の人に写真を撮ってもらったりしました。

『360°』という名前には、今まで知らなかった「ありのままの現地」を発見し、世界の見方を少しでも広げてもらえれば、という私たちの思いが込められています。

**目的**

現地を多角的視点から伝え、4 か国について考えるきっかけを提供するため。

(1)概要　4 学生団体による合同写真展

(2)日時　2015 年 5 月 30 日(土)、31 日(日) 11:00~19:00

(3)主催　学生国際協力 NGO FEST、アジア開発学生会議(ADYF)、学生団体 S.A.L.、風の会

(4)会場：Orange Gallery（http://www.e-tamaya.biz/og/）

＜展示内容＞

① 各国紹介…フィリピン、ベトナム、カンボジア、ネパール（人口、言語、宗教、GDP 等）

② インタビュー…現地の人に話を聞きながら撮影した写真と、インタビュー内容。

③ 現地目線…現地の人にインスタントカメラを渡して撮影してきてもらった写真。現地のありのままの姿を発信するため、撮影してもらった写真は取捨選択せずに全て展示。

④ 私たち目線…各団体のメンバーが撮影した写真を展示。私たち日本人学生の目に写った現地の様子を伝えるため。

＜結果・反省＞

- 集客方法の費用対効果が悪かった。
- 様々な年齢、職業のお客様に来ていただけた。(計 112 人)
- メンバーがお客様と話せる場を設けることで、直接的な感想やフィードバックを得ることが出来た。
- 協賛を頂くことができ、赤字にならなかった。
  (阿部建設様、CEC Japan 様、JOBRASS 様、リフォーム三協様)
- 他学生団体と交流することができた。

＜アンケート結果（一部抜粋）＞

- もう少しすべての国がほぼ均等になるぐらいの写真の枚数の配分だと良いかなと思いました。それぞれの国の色々な視点からの沢山の写真が見れて良かったです。(20 歳女性・学生)

- 私たちの目線と現地の人々の目線との違いが浮き彫りになっていてそのコントラストが良かったです。格差が西洋的な価値観だけでは考えることが出来ないなと思いました。（22 歳男性・大学生）
- ほのぼのさせる写真が多数あって、心の休養になりました。（66 歳男性・フォトグラファー）
- 便利か不便化というより、ご飯が食べれて、安心して寝れて、助け合える仲間がいることが世界どこでも普遍の幸せかな。（40 代女性・主婦）
- 特にメッセージを載せることもなく、ありのままの写真から日常が分かる点が良いと思った。もっと色々な国の写真があるとなおよい。（30 歳男性）
- 苦しくても笑顔で一生懸命生活している様子が写真を通して伝わってきました。（女性・公務員）
- 4 か国が混同して展示されているので頭の中が混乱してしましました。写真はいいと思います。（女性）
- 東南アジア＝貧困＝苦しいという先入観が変わった。（21 歳女性・大学生）
- テーマや個々人の先入観に縛られず、事実のみを伝えているところが学生らしいなと思いました。人の笑顔が素敵でした。日本人にはない表情です。（21 歳女性）

合同写真展『360°』FB ページ：
https://www.facebook.com/%E5%90%88%E5%90%8C%E5%86%99%E7%9C%9F%E5%B1%95360-1570737633200817/timeline/）

# インタビュープロジェクト　Humans of Cebu

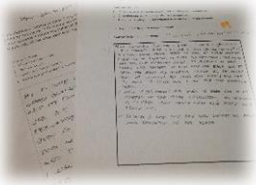
**立案背景**

「理想の世界の探究」のためにまず世界の問題を知り、考えるきっかけをつくりたいと考えました。不特定多数の人にインタビューすることによって、セブの人々にとっての理想の世界や問題だと感じていることについて聞こう、という理由でこのインタビュープロジェクトを企画しました。

**目的**

セブにある様々な問題について考えてもらうきっかけを作ること。また、セブやセブの人々に対する理解を深めてもらうこと。

**内容**



インタビュー形式で、自分自身が問題だと感じていることに関しての意見、捉え方を聞きました。
対象者のポートレート、またはその問題に関する写真を撮影し、インタビュー内容とともに Instagram で発信していくというプロジェクトです。
セブにある問題についてリアルな実態を伝えやすいと思い、常に直接的に問題について聞くのではなく、自分の生活について話してもらう感覚で話を聞いて回りました。

**質問項目**

夢やその人のバックグラウンドを中心とした質問をビサヤ語の説明資料を用意し、話しながらその場で紙に書いてもらいました。

**結果**

目標としていた 50 人を達成し 60 人にインタビューすることができました。またセブの市内を回る中でセブに関する理解が広がったとともに, 様々な写真リソースを集めることができました。
反省としては、今回のプロジェクトでは記述式を中心として進めたことで、英語が得意でない人へのインタビューや短い時間での大人数のインタビューができた半面、深い話や、個人個人の魅力を引き出すことができなかったと思います。また、写真の撮影方法も工夫できる点があると感じました。

**今後の展開**

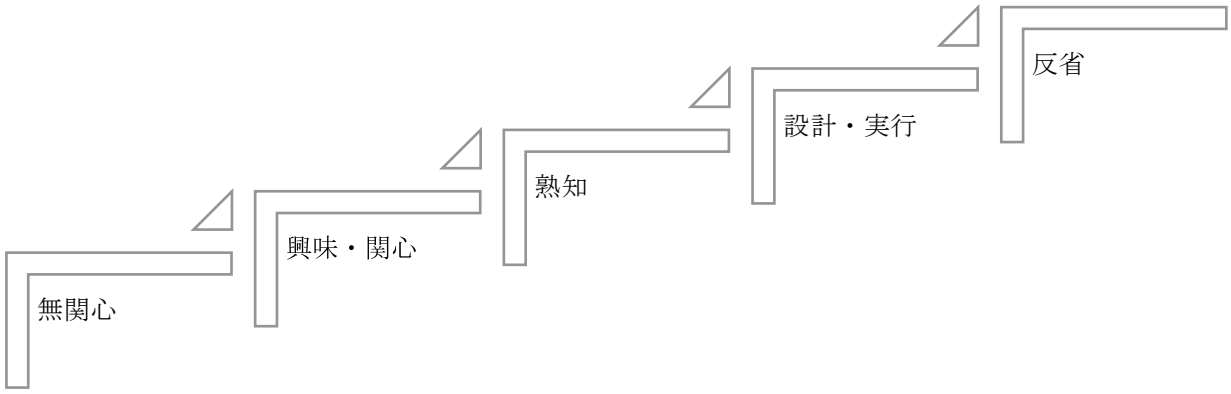
新たに FEST の Instagram のアカウントを開設しインタビュー内容と対象者のポートレートを定期的に発信していきます。発信する際は英語と日本語で発信していく予定です。Instagram を更新する際は Twitter とリンクさせて広報の面にも役立てていきたいと考えています。

Instagram Account: FEST.tokyo

# 国内事業部

# 国内事業部活動内容

◎アップリフトモデル




FEST の啓発、発信活動は「アップリフトモデル」という独自のモデルを軸に展開しています。アップリフト(Uplift)とは、(知的・社会的・道徳的な) 向上を意味します。出張授業やイベントを通して参加者にどうなってほしいか、どのような人物に向け、どんなイベントを立案、実行するかを考える上で重要な指標になっています。

自分たちの経験や国際協力に携わる方々の話を参考にしながら作成したこのモデルは、「一度きりでは終わらない」継続的な啓発活動を可能にします。また、対象者をより明確にすることで参加者のニーズに合った出張授業、イベントを実施することができます。

このモデルの最高到達点としては、対象者が問題や現状について熟知した上でどのようにアプローチすることができるのか設計・実行、反省するというサイクルを継続していける状態を設定しています。常に考察と実行を繰り返し、より良い支援、より良いプロジェクトを探究していけることは国際協力に携わる人間、もちろん FEST 会内にも求められる重要な「能力」だと考えています。

## PJ 名：Repeat! Repeat!

【立案背景】

国内事業部は事業部方針の一つを「国際協力におけるアップリフトモデルを定着させる」としています。何かの問題を解決するための手段として国際協力を選び実施していくには、現地の人々が支援者の参入により不利益を被ってしまうような支援があってはならず、そのために特に重要なのがアップリフトにおける「熟知」と「反省」です。すなわち、自らの計画や実行を正しく分析し改善したうえで再度行うことが、最終的には向う見ずでない、被支援者にとって有益である支援を可能にすると考えています。

上記のような支援が増えることを期待して、反省をすることで熟知を深め行動を改善していくというプロセスの重要性を伝えるイベントを起案しました。

【目的】

社会貢献活動などの問題解決を行う過程において、反省を繰り返すことで熟知へと至ることが大切だということを改めて感じてもらうこと。

【内容】

日時：2015 年 6 月 21 日（日）12：00～16：00

場所：自由が丘グリーンホール

幣団体を含む国際協力系の学生団体の、今春加入した新しいメンバーを中心とする学生を対象に実施しました。

紙をはさみなどで加工して製品を作り市場で売買する「市場取引ゲーム」というワークショップを通して、問題を解決する過程において反省と熟知が大切だということを、体感してもらいました。ゲームでは、作戦会議にてそれまでのゲームに関する反省や今後の戦略を明確にするといった点がゲームの成績を左右するよう製品価格や為替相場の変動など多少複雑なルールを盛り込みました。

ゲーム自体は国際協力の活動と直接的な結びつきを持ちませんが、国際支援活動に関連する事例を紹介することで、「反省」を経て「熟知」へと至ることが、国際協力をはじめとするあらゆる社会貢献活動を行う上でもそれを真に相手のためになる活動にするためには必須であることを伝えました。

【結果】

アンケート結果

5 段階評価項目の平均値

新人参加者：4.5

既存メンバー参加者：3.9

アンケート結果などから、多くの参加者の方に満足していただけたと感じていますが、団体説明や休憩などの時間配分や話のわかりやすさなど、運営面においての反省点も多くありました。

ゲームでは、目標を立てるだけでなくその後反省をして方向を再検討することの重要性を感じてもらう

ことができ、その後の活動に活かしたいとの感想をいただきました。また、新人の方については、イベントの流れを学べたことや他団体のメンバーと交流できたこともメリットとして挙がりました。

【今後の展望】
　今後も国内事業部独自の視点から国際協力のあり方について考え、これについて他団体の方の意見を得る機会を設けていきたいと考えています。これによって FEST の海外事業及び学生の国際協力活動を向上していくことを目指します。

## PJ 名：渡航フィードバック

【立案背景】
　私たち国内事業部員が活動をしてきた中で、OB・OG を含むメンバーの活動に関する主観的な意見を知る機会の少なさを感じていました。渡航で実施した事業に関して、客観的事実をデータとして共有するだけでなく、当事者たちがどのようなことを考えたうえで事業を進めたのかを知る機会を設けることでその経緯に対する理解を深め、今後の活動がスムーズになると考えます。また、渡航へ行ったメンバーが渡航を通じて感じたことを整理する場にもなると考え、この企画を立案しました。

【目的】
・渡航に行ったメンバーが、渡航を経たことで生じた発見や考えの変化などを、ほかのメンバーとの対話を通して整理し、より深める場を提供する。
・プロジェクト内で情報を共有し、来期以降も含め今後の活動をスムーズにする。
・すべてのメンバーがプロジェクト内・プロジェクト間でより活発な議論をできる機会を提供し、今後の活動の質を向上させる。

【内容】
日時：2015 年 9 月 20 日（日）18：10～19：00
場所：新宿区立元気館
　普段の活動時間を使い 4 人程度のグループでの話し合いを行いました。テーマは「渡航を通して自分にどのような変化があったか」とし、プロジェクトに限らない渡航中の話や過去の渡航、通常活動での経験など幅広く話せるようにしました。また、渡航参加者と不参加者とのバランスや学年・所属プロジェクトにも留意してグループを編成することで、参加者全員にとって有益な話し合いができるよう工夫しました。

【結果】
アンケート結果
満足度：4.0625

テーマを大きく幅を持たせて設定したことで、各グループが関心のある話を自由にすることができました。また、グループ内の座席の間隔を広く取ったことで大きな声で話すようにしたことや、語尾につける語を指定することで敬語を減らしたことも効果的でした。参加メンバーからは、所属プロジェクト以外の活動についての理解を深めることの重要性を理解できたという意見がありました。一方、時間が足りなかったために十分話せなかった、もっと他のメンバーとも話したかったなどの意見があったことから、十分な環境を整えられるようもっと早くから企画を練りメンバーに告知する必要があったと考えています。

【今後の展望】

　今回は事業が大きく進展する渡航の後でこのような企画を実施しましたが、今後もメンバーが入れ替わる時期やプロジェクトが行き詰った時など、様々な場面で複数のプロジェクト間で議論できる場を提供したいと考えています。

## PJ 名　72 億通りの国際協力

【立案背景】

今日、国際協力はメディアや学校の授業で多く取り上げられ、多くの人が国際協力について知る機会が多くあるため、国際協力に興味・関心のある学生は少なくないと私たち国内事業部員は考えています。しかしその興味・関心を実際に行動に移す人は多くありません。その原因を、自分は国際協力を行うには専門的なスキルが必要であると考え、国際協力に対するハードルを高く感じているためであると私たちは考えました。

しかし世界で国際協力という分野で活躍している人達についてみると、国際問題や国際協力についての専門的な知識ではなく自分の専門とする分野の知識・技術を利用し、国際協力に結びついた活動を行う人が多く存在しています。自分の専門分野を活かした多種多様な国際協力の取り組みを紹介することで、国際協力に関して多様な価値観を提供でき、国際協力についてより多角的に考えてもらうことができると考えました。

【目的】

・対象者が自ら国際協力を実行するためのきっかけを提供する。

・普段あまり入ってこない国際協力に関する情報やあらゆる人の考えを提供・紹介することにより、国際協力のあり方について多角的な視点から考えてもらう。

【内容】

独自の専門性を活かしてあらゆる方法で国際協力にかかわる活動をしている方へインタビューを行い、ウェブサイトに掲載します。

現時点で行ったものとして、アプリを活用して発展途上国の子どもたちに給食を届ける活動を行う企業を運営されている女子大学生にインタビューをしました。国際支援を始めたきっかけや給食というテーマに着目し活動する理由、今までの経験が今に活きているものなどについてお話を伺いました。

【結果】

この PJ に適していると思う取材先を選定することを通して私たち国内事業部員もあらゆる視点からあらゆる方法で国際協力に携わる方が沢山いらっしゃるということを実感し、より柔軟な思考で国際協力について考えられるようになったと感じています。インタビュー記事をサイトに掲載するのはこれからですが、良い反響を得られるものにしたいと思います。

# 引退メンバーコラム

*和久津 惠*

*一橋大学商学部*

*事業局長*

昨年の 4 月に入会してから気づけば 1 年半がたち、FEST での日々が終わろうとしている。FEST からは国際協力に限らず多くのことを学んだ。引退するにあたって何を書こうか迷っていたが、この 1 年半の活動を通して常に向き合ってきたもの、「もう一人の自分」について書こうと思う。

私が FEST に入会したのは大学二年生の時。国際協力の現場に関わろうと思ったのは、とても単純で元々興味のある人からすれば軽蔑されるような理由なのだが、海外に行って自分の知らない世界を見てみたかったからである。そんな軽い気持ちで入った国際協力の世界は、とても私ではどうすることもできないものだった。価値観も文化も違う国での活動、根本的な問題を解決しようとするがゆえの見えてくる、一学生団体の力ではどうすることもできない構造的な問題、支援地の人から向けられる不信感、あがいてみたところで感じたのは無力感だけだった。私が関わっていた支援地パライでは、何一つうまくいかず住民からは不信感を向けられる一方で、水道が完成し住民から慕われる支援地ピナハボン。同じだけ努力をしているはずなのに、結果は正反対だった。その中で、私の国際協力に対するモチベーションは徐々に下がっていった。FEST を続けるか悩んだこともあった。それでもなぜここまで続けることができたのか。

それは、私の入会理由でもあるのだが、FEST、そしてその中にいるメンバーの雰囲気が好きだったからだ。FEST に見学に来た時、私は本気で打ち込めるもの、そして本気で打ち込む自分を受け入れてくれる環境を探していた。FEST にはそれがあった。すでに引退していしまっている先輩たちは、今でもそうだが、真摯に接してくれ、気にかけてくれたからこそ、私は FEST での活動に本気で向き合うことができた。しかし、本気で何かに打ち込む時そこには必ず現れるものがある。そう、それこそが「もう一人の自分」だ。

「もう一人の自分」とは、自分のこれまでの人生の中における失敗やトラウマ、コンプレックスといった負の要素によって作られる、いわば過去の自分である。私の場合、「もう一人の自分」は、仕事において失敗を恐れ、人間関係において人からのマイナスの評価を恐れ、誰にも弱みを見せることなく誰にも頼らず自分ですべてを抱え込んだ末に自分で自分を追い込む。高校時代務めた体育祭実行委員長では、準備段階からあまり仕事に対して積極的な姿勢でない委員を上手にマネジメントすることができず、挙句体育祭本番に失態をおかし例年通りに体育祭を終わらせることができなかった。仕事と人間関係どちらにおいても失敗したのである。大学 1 年生の時に務めた学園祭におけるサークルの出し物では、仕事は成功したものの、あまり周りに頼ることをせず自分で抱え込んでしまった結果、人間関係において失敗をしてしまった。私は事業局長を務めたこの 1 年間、これらの経験からより確固たるものとして確立

されてしまった「もう一人の自分」と向き合わなければいけなくなったのである。一人では決して成功させることのできないプロジェクト、それぞれの立場、考え方により衝突するメンバーとの信頼関係、どちらも成功させるには「もう一人の自分」、弱さを隠した結果誰にも頼ろうとしなかった過去の自分を超えるしかなかったのだ。

それは私にとって一筋縄ではいかないものだった。これまでは自分の弱さを見せられるほど相手を信頼することなどなかった。それもそのはずで、私は自分の弱さから目を背け、自分を認めようとしていなかったからである。自分を認められない者に相手を認めることなどできるはずがない。しかし、自分の弱さと向き合い続け、自分の弱さを認めたうえで相手に弱さをさらけ出すようになってからは、自然と相手のことを認められるようになった。相手のことを認められるようになってからは、自分の思っていることを素直に相手に話すとともに相手の悩みを聞くようにした。最初はうまくいかず、メンバーと衝突することもあったが、努力の結果、少しずつではあるが周りのメンバーからの信頼を獲得していくことができたのである。私はその時初めて、代表のように表に立つ役職ではなく、メンバーを陰から支える事業局長という役職になってよかったと思うことができた。

しかし、メンバーからの信頼を獲得することができてからは、別のことで悩み始めた。引退する最後の機会なので、その胸中をこの場で明かそうと思う。私はすでに述べた通り、国際協力に対するモチベーションを徐々に失っていく中で、それと同時に徐々にメンバーからの信頼も獲得していった。頼られる存在となって以降は、国際協力に対するモチベーションの高いメンバーからの相談を受け、それに対して答える場面も多くなったのだが、そこに私は大きな矛盾を常に感じていた。国際協力に対するモチベーションが下がっている私がほかのメンバーから頼られる立場であっていいのかと。特に過去の自分を乗り越えることができた春渡航以降、半年近くずっと胸につかえがある状態であった。そんな私であってもここまで続けることができたのは、一概に私がメンバーを支えていただけでなくメンバーも私のことを支えてくれていたからだと思う。こんな私を慕い、そして支えてくれたすべてのメンバーに感謝を述べたい。

引退するこの時期になってとうとう私の役割はごくごく小さいものとなってしまった。プロジェクトに関しては、メンバーそれぞれが自ら考え議論し結論を出すことができるようになった。メンバーの悩みに関しては、メンバー間で話をするようになり、より強い信頼関係が築かれるようになった。私の持っていた役割がなくなってしまった今、少し寂しい気もするが、私が担っていた役割が次の代のメンバーにもしっかりと引き継がれたということで私は事業局長としての最後の仕事を全うできたのではないかと思う。これまで数多くの失敗をしてきて、自分の理想とする事業局長にはなれなかったかもしれないが、今はこの 1 年間の自分の努力と今の自分の姿を素直に認めてあげようと思う。これをもって私の引退コラムを終わりとする。

*木村茉莉*

*立教大学経済学部*

*海外事業部長*

FEST の渡航報告書をお読みの皆さま、初めまして。第 5 期海外事業部長を務めさせていただいておりました木村茉莉です。本来ならば 3 年生の秋が FEST での公式の引退の時期ではありますが、特別に少し先に FEST を離れさせていただき、現在アメリカで国際開発の勉強をしています。最終的にこの選択をすることになったことも FEST の経験があったからこそだと思います。

1 年生の春。国際協力に、人を助けることに興味があった私は将来国際協力の仕事をすることを目標にしながら、FEST に入会しました。そんな私は初めての夏渡航で何もできず、国際協力の難しさと現実に打ちのめされ日本に帰ってきたことは今でも忘れられません。当時私はピナハボンの前身であった新支援地班に属していましたが、初めての渡航から 2 年半ピナハボンに水が届き、撤退にまでこぎつける、その段階に自分がかかわることができると当時の私はきっと想像していなかったでしょう。

ずいぶん長い間ピナハボンのプロジェクトリーダーや現地責任者を務めさせていただいたせいか FEST での私はほとんどピナハボンでできているといっても過言ではありません。「ピナハボンの人の笑顔」が見たい。今まで FEST で活動してきた自分の根本にあったのはずっとこの言葉だと思います。FEST にいる間に、私の思いの相手は顔もわからない誰かからピナハボンという明確な相手に変わりました。学生が国際協力をする意味、国際協力はただの先進国のエゴなんじゃないか、自分がやっていることの意味が分からなくなることも多くありました。それでも続けてこられたのはきっとピナハボンの人たちに出会うことができたからだと思っています。

さて、少し話は変わりますが、私はプロジェクトとは別にピナハボンで写真を撮る活動をしていました。フォトワーク事業部ではなかったので写真を撮ることは FEST としての役割ではないのですが、写真やカメラは私にとって特別なものでした。カメラが現地とのコミュニケーションツールになって距離を縮めてくれました。子供たちと一緒に写真を撮って遊んだり、集会の後に記念写真を撮ったり、道にいるにわとりの写真を撮ってみたりと毎回渡航に行けばたくさんのいい写真がとれました。たった一瞬の写真に裏側にある多くの見えないことを考えさせられ、笑わされ、また頑張ろうと思わされました。そして、もうひとつ、私は現地での FEST メンバーの写真を大切にしていました。プロジェクトリーダーとして、事業部長として、ピナハボンの責任者として、一人のメンバーとしていつも前に進めていたのは支えてくれるメンバーがたくさんいたからです。いつも一人で突っ走ってしまう癖がある私についてきてくれ、支えてくれたメンバーがどのような顔をしているのかそれはいつも私が気になっていたこ

と、写真ですべてがわかるわけではないのですが、現地ですぐに回りが見えなくなってしまってしまう私にとってはすごく重要なものでした。FEST から離れることになった今、毎回の渡航で撮った写真は私の大切な宝物です。

FEST の活動を通して私の目標は国際協力の仕事をすることから、国際協力の仕事を通して人々の選択肢を増やすということに変わりました。増えた選択肢を選択するか、それは個人の自由です。必然的に与えられる環境ではなく、選択できる環境があるということが大切なのではないかと考えるようになりました。そんな目標を達成するため、自分の足りないものを補うために、私は今アメリカにいます。苦しいこともつらいこともたくさんありましたが、それ以上に素敵なことがたくさんありました。FEST の経験があったからこそ、私はまだ国際協力の世界を目指し頑張ろうと思っています。まだまだ道は長いですが、いつかまた違った形でピナハボンにかかわっていけることを願い、また少しずつ前に進んでいこうと思います。

最後にはなりますが、FEST で出会った方々、現地の方々、本当にありがとうございました。

*小林咲*

*慶応義塾法学部*

*フォトワーク事業部*

東南アジアへのスタディーツアーに参加したことを大きなきっかけとして、私は 2 年生の春に FEST に入会した。所属先はフォトワーク事業部。写真展を企画したり、渡航でのインタビュー内容を考えたりするのは楽しく、時間はあっという間に過ぎていった。

そのような充実した FEST での日々と並行して、私は貧困についての演習の授業を取っていた。なぜ豊かな国と貧しい国があるのか、について考えるこの授業で私は初めて、貧困を構造的に捉えることを学んだ。前期が終了する頃、この授業で得たことを自分なりに解釈した。それは、「貧しい国の政府が変わらなければ、貧困はなくならない」ということである。私はそこで、今自分が FEST でやっていることの意義はあるのか、と考え始めた。もちろん、所謂草の根的な活動が無意味であるとは思わなかった。しかし結果として、ずっと入りたいと憧れていた国際協力の NGO や JICA 等に対する興味を失ってしまった。

一方で、渡航で現地での FEST の成果を目の当たりにすると、止まらず溢れ出てくる感情がある。それは、FEST で活動していて良かったな、というものである。現地の人の生活改善に協力し続けることが出来ればいいな。私はこういった想いと、上記の自分の考えのジレンマで悩まされた。

今考えると、このようにもやもやしていた時間は無駄だった。学生による国際協力には、限界がある。このような前提を持っていた、頭が凝り固まっていた時間が長すぎた。故に、私はフォトワーク事業部で発信活動等をする際も、そのような前提を持ちつつ、自分の影響力の小ささを常に感じていたのだった。国際協力に対して、そして自分の活動の意義に対して、自分自身で疑問に感じていたことが、とても恥ずかしい。

学生による国際協力の限界は、ないのである。この前提が私の中で消えたのは、最近のことだ。国際協力はやってみないと分からない。そして学生だからこそできることは本当にある。このことについて、現地の人々、FEST メンバー、そして発信活動に共感・応援して下さった方々から教えてもらっていたということを、FEST での 2 年間を振り返る 3 年後期になって初めて認識した。

私の周りには、ボランティアや NGO はただの自己満足だ、と言う人が少なくない。私はこのような発言に対して怒りを覚える。そんな時、思い浮かべるのは現地の人たちだ。彼らの家族や笑顔を守るために頑張っている人たちがいる。そしてそれは決して自己満でも無駄でもない。君たちは何を知って言っ

ているのか、と反論する。しかし、国際協力に対する意義を見失っていたつい最近までの私にも、このように言う権利は果たしてあったのか。実は、今考えている最中である。答えが出ることはないかもしれないが、これを考えることは自分が FEST にいた意味を理解することに繋がると思っている。

このように、相反する 2 つの感情の狭間にいた私は、FEST で活動しながらも国際協力から離れて沢山浮気をした。そんなもんだから、今は将来何をしたいのか絶賛迷走中だ。国際協力を職業にしたいとさえ思って FEST に入ったが、逆にその軸を失ってしまった。悩める日々である。しかし、今の世界を変えたい、貧困をなくしたい、という意識は変わっていない。それは、FEST が国際協力以外でも言葉に表せないぐらい多くの知識や経験を与えてくれたからである。

FEST は、現在の世界に何らかの疑問を感じ、変えようと行動に移した勇気ある者たちの集まりであると思っている。私は、綺麗ごとではなく、メンバー一人ひとりを尊敬している。また、様々な新しいことに挑戦する機会を与えてくれた FEST に対して、とても感謝している。FEST で考えたこと、つらかったこと、楽しかったこと、私は一生忘れない。

この報告書で、3 年生はどんなことを暴露しているのだろうか。それぞれ色々な想いを抱えて、ここまで来たのだろう。私は、たらたらと自分のことばかり書いてしまったが、なんだかんだ FEST が大好きだということが伝われば、それでいい。そろそろ引退だ。3 年生全員が、そして引き続き FEST が、世界に大きく羽ばたいていけますように！

*佐々木 淳*

*海外事業部・広報部長*

*首都大学東京都市教養学部*

「“ラポール(rapport)”の形成」

学生国際協力 NGO FEST TOKYO の第 5 期活動報告書をご覧いただき、ありがとうございます。

都市教養学科 人文・社会系 社会学コース 社会人類学分野 3 年の佐々木と申します。肩書きが長すぎるという定評を頂いております。分かりやすく言うと、首都大学東京で文化人類学ないし社会人類学を専攻している 3 年生です。

人類学のことを知っている人は少ないので、いつも私がしている説明を簡単に述べておきます。文化(社会)人類学とは、世界中の文化のことを、主にフィールドワークを通して調査し、そこの民族誌を書いたり、他の様々な文化と比較研究をしたりする学問です。

一番の特徴はフィールドワークの方法なのではないかと個人的には思います。フィールドワークぐらい他の学問でも行っているではないか、と思われるかもしれませんが、人類学者のフィールドワークの方法は、ただ現地に赴いてインタビューをしたりアンケートをとったりすることだけではありません。人類学者は、対象の人々の間に入っていき、彼らの言語を覚え、彼らと寝食を共にし、彼らの生活に溶け込みます。さらに彼らの生活に参加をしながら、観察者として彼らのことを内側から見つめることもします。これを「参与観察」と呼びます。だいたいの人類学者は 1～2 年間は現地で生活しながら調査をします。その間に、日本では考えられないようなものを見たり聞いたり、実際に自分がやったりすることもあります。そのせいなのか分かりませんが、うちの先生方はちょっとおかしいところがあります。

この人類学者のフィールドワークのスタイルを実施する上で重要なことは、自分と現地の人々との間に信頼関係を築くことです。この調査者と対象者との間の信頼関係のことを“ラポール(rapport)”と呼びます。一緒に生活する以上、信頼関係がなければ、調査はおろか寝食を共にすることも困難となります。そのため、まず最初に人類学者が行わなければならないことの一つが、ラポールを形成することなのです。

私が大学でこのことを専門的に学んだのは、2 年生になってからのことでした。また FEST として一度フィリピンに訪れた後のことでした。そして私は考えてみました。「私たちは“ラポール”を形成することができているだろうか、いや果たして形成することができるのだろうか」と。前置きが長くなりましたが、これがこのコラムのテーマです。

私たち学生国際協力 NGO FEST TOKYO は、春と夏の長期休暇中にしか現地に訪れず、各渡航で長くても 1 ヶ月、短い人は 10 日ほどしか滞在しません。更に安全対策として、夕方には支援地からホテルに

帰ってしまいます。加えて、コミュニケーションをとるのは現地語ではなく、つたない英語です。現地の人々が彼ら同士で話すときは現地語で、私たちFESTメンバーは、メンバー同士では日本語で話しをするので、互いに何の話をしているのか分からない時間が多々あります。支援地の方のことを信用しているのに、誘いを断らなければならないことも少なくはないです。もちろんどの安全対策ルールにも従うべき理由がありますし、支援地の方が良い方だとは分かっていても、全てのフィリピン人がそうではないこと、フィリピンは基本的に日本よりもはるかに危険であることは重々理解しています。交流の機会と安全対策を天秤にかけた場合に、私たち学生は安全対策をとるしかないのです。

では一緒に過ごす時間が少なく、コミュニケーションもとりにくい私たちがラポールを形成するにはどうすればよいのでしょうか。

私はFESTメンバーとして今までに4回、合計で約4か月フィリピンに滞在し、ピナハボンでの活動に取り組みました。最初の渡航のときはあまりコミュニケーションがとれず、誰かと信頼を築くに至りませんでした。そして2回目の渡航では、1ヶ月の経験や大学の授業を利用した英語の練習などのおかげか、コミュニケーションをとれるようになりました。その結果、世間話だけでなく、プロジェクトの話なども住民からしてくれるようになりました。このことは、以前よりも自分が信頼されるようになったことの証と言えると思います。そして3、4回目の渡航ともなると、多くの住民から顔と名前を認知されるだけでなく、よく話をする人からは自分がどういう人間であるかも理解されるようになりました。

以上が簡単ですが、私とピナハボンの人々との関わりの説明です。そして今、引退を前にして「“ラポール”を形成することができたか」どうかを自分に問いかけてみました。たしかに住民からは信頼され、自分自身も住民を信頼し、ある程度の時間を共有することができましたが、私は人類学者が求める“ラポール”を形成できたとは言えないと感じています。それは、やはり共有する時間が少なすぎるからではないかと思います。ただ、それが悪いことだとは思っていません。もちろん、ピナハボンやそこに住む人々を深く理解し、プロジェクトの実施などに活かすことができれば、いい面もあります。しかし、支援地で過ごす時間が限られていて、“ラポール”を十分に形成できない学生でも、ある程度の信頼関係を築けていれば支援ができると証明することは、大いに意味のあることだと思います。今回のピナハボンの事例は、その証明のための第一歩です。それから、信頼関係を築くのに遅すぎるということはありません。またいつかピナハボンに訪れたときに、いろいろな話をして、そのときに“ラポール”を形成することができることができたらいいなと思います。

以上になります。最後までお読みいただきありがとうございました。

*松岡 優馬*

*国際基督教大学教養学部*

*海外事業部*

僕達は世界を変えることができ

「僕は世界を変えることができるのだろうか。」これが、FEST に入団する前、入団後、そして留学で団体を半ば抜けてから考え続けている問です。僕はこの団体で活動し、世界を、そして自分自身を変えることができたのでしょうか。

この問に答えるのは簡単ではありません。第一「世界」といっても大きすぎて僕には何の事だかよく分からないし、「変える」という言葉にも人それぞれの捉え方が存在するからです。僕が団体に入団してから実際に行ってきた行動は数えきれないし、それがどのような影響を世界に与えたかという事に関しては無限に近い解釈が存在するでしょう。

だから、ここで僕がこの問に真摯に向き合ったところで、何も生産的な物は得ることができないかもしれません。たとえば像について何かが書けたとしても、像使いについては何も書けないかもしれない。僕が、問いに答えるのは簡単ではないと言ったのはそういう意味です。

なんて村上春樹みたいな冗談はこれくらいにして、最後くらいこの問に答えてみようと思います。これは国際協力という分野にかかわった人が避けては通れない問なのでしょうし、その答えがいかに青臭いものになってしまったとしてもきっと笑って許してもらえるでしょう。僕に与えられたのは A4 を 2 ページという限られたスペースなのですが、もうすでに面白くない冗談だけでかなりのスペースを消費してしまいました。さっそく、僕が入団をするときの事から話をすすめていこうと思います。

さて、団体に入る前の僕はと言えば「世界は確実に良い方向へ変えることができる」と考えていました。という振り返り方は少々ご都合主義的かもしれませんが、それでも問題の原因を調べたうえで、総合的な政策的アプローチを取り、正しいプロジェクトのサイクルを重ねていくことで団体を、そして世界をより良い方向へと進めていくことができるという自信はしっかりと持っていました。早い話、僕は他人の目で客観的に世界を眺めることができていました。考えてみればそれもそうでしょう。僕はまだ、行動を起こすことさえしていなかったのですから。

さて、団体に入り活動をする中で「自分の力がいかに小さいか」ということに気づくことになります。という定石通りの流れに関してはご勘弁いただきたいものです。なぜって、実際にそうだったのですから。毎週の活動と航空券という莫大なコストを払って入念に準備をしたプロジェクトが、様々な不確定要素により次々と潰される悲しさは何度体験しても慣れるものではありません。しかし考えてみればそれもそうで、国籍・言語・年代・文化そして価値観という枠を超えて何かを成し遂げるということはそ

う簡単ではないのです。そうやって現場での経験を重ねながら、僕は世界を変えるということの大変さを思い知ったのでした。

しかし「世界を変える」ということは、そういったヒロイックで革命的な結果を必要とするのでしょうか。例えばバイトとしてコーヒーショップで働くという平凡極まりない行為も一定数の人々に、それも生きた人間に、確実に影響を与えます。それを少し頑張って技を磨く、もしくはサービスを磨き満足してもらう。そういう努力が重なれば、そしてそれが他人へと波及すれば、その結果はバタフライエフェクトなんて難解な説明をせずとも大きなものとして現実に現れるでしょう。そういう風に考えれば、僕が FEST で行ってきた活動は確実に世界を変えていたのかもしれません。

いえ、はっきり言いましょう。僕はそういう考えがすきではありません。「一人の人間が、しかも学生が何かをしたところで十分なことはできない。」という冷め切った他人としての意見も「僕たちは確実に何かを変えているんだ」という楽観的な意見も。だから僕は今でもわからないのです。「一体、僕は世界を変えることができたのだろうか。それとも、できなかったのだろうか。」

しかし、これだけは言えます。これこそが世界と向き合う上での一つの正しい姿勢であると。なぜならば世界はとてつもなく複雑で、簡単な答えを許してはくれないからです。優れた修行僧はただ「静かに座ってご飯を食べる」という行為から真理を、そして全てを学び取るという話を聞いたことがありますが、世界を相手にして私たちが考えなければならないことは無限に存在します。そのような大変さを経験する中で、「世界を変えることができるのか」という事に関する「答え」が、そして「問」もが深まっていくのは当然のことでしょう。だからこそ僕はそのような経験を与えてくれた国際協力に、そして、特に批判的にかつ建設的に考えることを強いてくれた FEST という団体に本当に感謝をしています。

さて、引退に際してつらつらと入団前からの思いを振り返ってみましたが、そろそろ筆を置かなければならないようです。結局最後まで答えらしい答えを見つけることもできなかったのですが、今はあえて今までの活動を「問い」で締めくくるのも悪くないかなと思います。願わくば、僕が置いた筆を後輩が引き継ぎ、不完全な問いを完成させてくれることを願って。

「僕は、世界を変えることができたのだろうか」

*津田　恵梨子*

*慶應義塾大学法学部*

*海外事業部*

「あぁこの人たちは私が自分の生活を送るのと同じようにここで彼らの生活を送っているだけなんだな」これは 2 年生の春休みに生まれて初めて途上国に行き、スラム（支援地）の人たちに出会った私が感じたことです。

「きっとスラムというところは臭くて汚くて貧しい人々が貧困に苦しんでいるだろう」くらいのネガティブなイメージをそれまでの私は勝手に抱いてきました。しかし、このイメージは決定的に間違っていました。彼らは「自分たちが貧しい」ということを受け入れたうえで、悲壮感や暗さなんて全く感じさせない明るさと逞しさで生きていました。飽きっぽく、何事も長続きしない私が FEST での活動を曲がりなりにも続けてこられたのは、そんな日本でぬくぬくと育ってきた自分とは全く価値観を持つ彼らに純粋に惹かれたことも大きいのではと感じます。

幼い頃からユニセフなど国際協力に興味はあったものの、歳をとり「将来」が遠い未来から近いものとなるに連れ自然と諦めるようになってしまっていた私が、大学生というなんでもできる時期を使って国際協力というものを少しでも体験してみようと入ったのがこの FEST でした。

私が所属している居住地生計班では住民からの、生活向上と安全な土地に住みたいというニーズにそれぞれ応えようと活動して参りました。入った時期が遅かった私にとって、ミーティング中に飛び交う用語は知らないものばかり、状況も把握しきれない、そもそもプロジェクトの根幹にある仮説の重要性すらちんぷんかんぷんで正直、今思うとふわふわした気持ちで周りに頼りきりな心持ちで初渡航に望みました。「支援」という言葉の持つ効力なのか私の人間性に問題があるのかは分かりませんが私は実際に支援地の人に会うまで、心のどこかで「支援地の人たちは困っていて私たちがそれを助けてあげるんだ」くらいの意識があったのだと思います。なので、初めての住民と FEST 間のミーティングに全然人が自主的に集まらなかった時はとてもショックでした。当たり前ですが住民にはそれぞれ生活があって、しっかりとした意思や考えを持って生きていて、FEST とともに活動することに価値を見出してもらわないと話を聞く時間も割いてもらえません。「これは思ったよりも難しいぞ」と自分の甘さを痛感しつつも、思うように進まないプロジェクトに毎日頭を悩ませ、全く自分とは違う価値観を持つ現地の人たちと関わり色々な話を聞く中で自分を見つめなおす 20 日間というのはとても新鮮で濃密な時間でした。それはもう、「一度渡航すれば十分だわ」などと考え、春渡航を終えたら FEST を辞めようと思っていた心づもりをひっくり返してしまうほどに。

春渡航から帰って、かつては自分の中でどこか他人事だった FEST という団体がどんどん大切なもの

となっていきました。週に１回、少なからず同じことに興味を持ち真剣に取り組んでいる仲間に出会い議論を交わすことは、飽きっぽくて煩雑な日常に飲み込まれやすい性格の私にとっては自分を見失わないよう生活にメリハリをつけるうえでもとても大事なことでした。そんな中で時間をかけて立てたプロジェクトを携え、前回よりもずっと地に足がついた心持で少し緊張気味に夏渡航に向かった私を待ち受けていたのは住民からの FEST への明らかな無関心でした。

「FEST が何をやっているのか分からない。プロジェクトも何の成果も出していない。」というのが支援地に着いた日に言われた言葉でした。挽回しようと必死に動き回り駆け抜ける 10 日間が始まりました。その中でとりわけ嬉しかったのはリロケーション（移住）に全く非協力的だった住民のリーダーが、話し合いを通じて移住のための協力を承諾してくれた時でした。現地の人と対等に話し合い認めてもらえたこと、そして今までやってきたことは無駄じゃなかったと感じられたことがとても嬉しかったのです。でも今振り返ってみてこの時の行動が本当に正しかったのは分かりません。もしかしたら住民が非協力的な時点で辞めておくべきだったのではないかとか、非協力的だった背景には深刻な理由があったのだとしたらどうしようとか自分の行動は強引じゃなかったかとか不安なことだらけですし、正解も分かりません。

思えば、FEST や国際協力について考えれば考えるほど頭を悩ませることは多かったように感じます。だからこそ、1,2 年生の間ふらふらと過ごしてきてしまった私にとって FEST との出会いはかけがえのないものです。住民のことを考えながらプロジェクトについて真剣に議論している時、そして現地で日々頭を悩ませつつ駆け抜けている時、私は心の底からワクワクしたり落胆したり喜んだりと「生きている」ことを実感してきました。

それでも私が FEST でしてきたことは世間一般から見ればただ「ボランティア」と括られ、意識高いよくある活動、何が面白いのか分からないなどとネガティブに遠ざけられがちなのが現状です。少し悔しくもどかしい気持ちをすることも少なくはありません。答えのない国際協力の中で私 1 人が出来ることなんて限りなくゼロに近いと思い悩んだこともありますが、今は、例え 1 人の人からでもそういった敬遠や無関心を取り除くことが出来たら勝ちだと思ってまずは少しでも多くの人に FEST のことを伝えていけたらなぁと思います。

私にこんなに素敵でかけがえのない経験をさせてくださったメンバーの皆さま、本当に本当にありがとうございました。

*平野彩月*

*立教大学コミュニティー福祉学部*

*海外事業部*

大学 1 年生の 6 月頃に FEST に入り、2 年と少しがたっていることを思うと、ものすごく早く時間が過ぎているように感じますが、FEST での経験を考えると、かなり濃いもので、もっと長いこと FEST にいたような気もします。 そんな FEST での私の成長と、最後に考えていた支援地のこと、2 つを拙い文章ではありますが、書かせていただこうと思います。

【私と支援地パライ】

そんな FEST には、「実際に現地へ行って、自立支援をしたい。」という想いで入り、私は入会当初から、支援地のパライで活動を行ってきました。パライ班としての活動を通して、最後まで、疑問に思っていることがあります。それは、「私たち、FEST がパライを支援すべきであったのか、支援できるのか」ということです。現地の人のような、私たちからみれば貧困層と言われるような社会的弱者が生まれるのは、大きな枠組みで見れば、現代社会の構造的問題が根本にあるのだろうと思います。その上、私たちは、学生という身分で、知識や技術等、様々な面で未熟です。そのような中で、私たちは現地住民にどれだけ影響を与えられたのでしょうか。そのように考えてしまうと、私がこれまで活動してきたことは、現地にほんのすこし触れただけのように感じます。結局、ただただ私の拙い考え方で、煮詰まらないまま引退を迎えます。 しかし、改めて考えると、社会構造という根本的問題に対してでも、少しの影響力の積み重ねが必要なのだろうと思います。丁度、FEST に入会した頃に、ある国際支援をされている方が、「もしかしたら根本にある問題というのは解決しないかもしれないが、兎に角、活動を続けていくことが大切だと思う」とおっしゃっていました。私は度々、この言葉を FEST の活動の中で思い出し、考えることがありましたが、最後にもう一度考えると、その言葉の意味が、より理解できたように思います。

大きなフレームで見れば、少ししか関わっていないように思いますが、実際に、FEST としては、約 5 年もパライに関わっています。自立支援の面で見れば、関わりすぎているようにも思います。しかし、その関わりも、上で述べたような、支援の継続であり、どのような形でも、自分たちが納得のいくものになれば、いつか、どこかで、影響力のあるものになるのではないかなと思います。

この疑問は活動をすることへの疑問にもなっていましたが、引退を迎えた今は、自信をもって支援をしていたと言いたいと思います。パライから離れるところまでは見届けられませんでしたが、今後もパライ班が、自信をもって支援をしたといえるような形になればいいなと思っています。

【私と FEST】

私は、率直に言うと、極度のあがり症、そして、ありえないほど感情的な性格です。オリセン、渡航のホテルや空港、そして新宿駅改札前など、ありとあらゆる場所で泣いてしまったのを覚えています。入会当初から、そんな感情的な泣き虫だったので、引退された先輩方には心配をかけ、本当にお世話になったなと感謝しています。正直、途中でやめてしまうのではないかと思っていたけど、そんなことなかったね、と謝られた事もありました。周囲は先輩をはじめ、同期や後輩も、尊敬してばかりで、何もできない自分に悩んだことが多々ありましたが、ずっと、最後まで続けたいと私を頑張らせてくれた FEST のメンバーやパライの人たちにも感謝しています。正直、泣き虫な私は最後まで変わりませんでしたが、泣いてでもくらいついて行こう。と思いながら、ついに引退を迎えてしまいました。このように考えると、FEST は私に忍耐力を与えてくれ、さらに、悩んでばかりいた私に、「私は私でいいのだ」ということも教えてくれたように思います。

締まりが悪いですが、最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

FEST、パライ、本当に大好きです。ありがとうございました。

*星野里実*

*成城大学社会イノベーション学部*

*海外事業部*

こんにちは。海外事業部パライ班の星野里実です。自己紹介として、成城大学の社会イノベーション学部心理社会学科に属しています。文章を書くことが不得意なのでわかりづらいですが、お読みいただければ嬉しいです。私は、大学 2 年生の始めごろに FEST に入りました。まず、なぜ私が国際協力をやろうとしたかについてお話ししようと思います。一番のきっかけは、大学の授業です。私の専攻は国際社会学で、国内、海外の国際問題や文化、エスニシティ、開発、ジェンダー、環境、ナショナリティ、グローバリゼーションなど幅広くテーマを取り上げて、今まで学んできました。また、同時に心理学も専攻していて、その 2 つが合わさった分野である社会心理学に興味を持ち始めました。自分とはまったく異なる社会の中で暮らしている集団または個人の心理とその人の行動を知り、そのうえで人の役に立てればいいなと思ったのが FEST に入った理由になります。

そんな単純な考えで入ったわけですが、FEST での活動は私が思っていたよりも現実的で複雑で困難なことが多かったように思います。年に 2 回の渡航、期間は毎回およそ 1 カ月。十分な知識もお金もない。この中でパライの問題を解決するには、計画性やリスク管理、さまざまな方向性や可能性を吟味する必要がありました。しかし、渡航に行くまでに十分すぎるほどの準備をしても、現地では予想外のことばかりが起きて、せっかくたてた計画もまた練り直しになっていました。そのたびに自分の浅はかさや注意力の無さ、知識の無さを痛感していたように思います。さらに、プロジェクトを進めるにあたって壁となっているのがやはり言葉や環境、文化の違いでした。特に、文化の違いに関しては、これを理解し、考慮しなければいけないことはわかっていても、実際にプロジェクトを進めるとなると、考慮しても十分ではありませんでした。例えば、時間通りに集会が始まらないことは日常茶飯事で、それを見越しても、思い通りにいかないことが多々あったり、住民の抱えている問題を 1 つとって、その問題の原因を追究してみても、結局、国民性なのか、個人の問題なのかということや、何が住民の行動を抑圧しているのかが分かりづらく、文化の壁に憚られていることを実感していました。

でも、つらいことだけでなく、興味深いこと、楽しいこともありました。興味深いことといえば、まるっきり国籍も言葉も環境も文化も異なる人々と関わりあうこと、パライの人たちと仲良くなることだと思います。私は、英語が得意ではなくて、さらに人見知りだったため、初めての渡航では右往左往してばかりいました。本当にパライの人たちとの距離感が分からず悩んでいた覚えがあります。でも、少しずつ少しずつパライという環境に慣れていくと、心の障壁がなくなっていって、だんだん会話も弾んでいきました。この経験は簡単に手に入れられるものではないし、私にあらゆる発見をもたらしてくれ

たと思います。

と、ここまでざっと FEST に入ってからの体験や感想を述べましたが、結果的に自分が何を得たのかを考えると、経験を除いては、ありとあらゆるものに対しての疑問や、自分の行ってきたことについてのもどかしさかもしれないです。知れば知るほど、自分がどこに向かっていくべきなのかがわからなくなってしまっている気がしました。でも、FEST に入る前の自分のことを振り返ると、社会の問題や構造になんの疑問も持たず、ただ楽しければいいやという生き方をしていたので、それを思うと少しばかりはましになったかなと思っています。今は、感情的に物事を考えていた私に懐疑的な視点や論理的思考能力をわずかでも身につけさせてくれた FEST に感謝しています。

ところで、FEST に入った理由は、異文化を知りたい、異文化間の心理を実感するとともに、貧困改善につながればいいなというものでしたが、引退を前に振り返ってみると、この考えは半分正解で半分間違っていたと思います。正解の部分は、異文化を学べたことです。フィリピン人が家族を大切にしたり、自分だけでなく他人の面子を大事にする精神から起こる行動を実感することができ、日本人との違いを痛感しました。不正解の部分は、人の役に立つのは簡単ではないということです。知識や経験のなさはデメリットではありましたが、FEST を通して自分の弱みや新しい気づきができてよかったと思っています。

まとまりがありませんが、最後に、パライの人たちを始めとしたいろいろな出会いを通して成長させてもらい、非常に感謝しています。

最後までお読みいただきありがとうございました。

*小黒佑太郎*

*フォトワーク事業部*

*明治大学農学部*

私が初めて FEST の見学に来たとき FEST の先輩たちや一緒に見学しに来た同期たちを見て一番最初に、あ、自分にはこの団体向いてないかもな、なんて思ったことを今でも覚えています。決して FEST が嫌いなどと思ったわけではなく、頭の良さだったり、国際協力にかける思いだったりが自分をはるかに超えていたように感じたのだと思います。

しかし自分すぐ辞めるだろうなぁと思いながらもいつの間にか FEST に入会し、大事なところで影を薄くするなどしながら何だかんだ FEST になじんでいき、アッという間に 2 年半が経って引退の時を迎えてしまいました。本当にあっという間でした。。。

今回は最後なのでこんな自分が初めて支援地を訪れてからずっと思ってきたことについて少し書こうと思います。

私が初めて支援地を訪れたのは 2 年半前のことです。私はすごくドキドキしながら FEST の支援地の 1 つであるパライに足を踏み入れたのを覚えています。私はそこで初めてスラムというものを目にしました。そこでは、私たちが普段何気なくやっていることの多くが彼らにとって当たり前ではありませんでした。蛇口をひねっても温かいお湯なんて出てこないし、そもそも多くのスラムでは水道すら整備されていることがめずらしく、トイレは垂れ流しで、あたりには悪臭が立ち込めていました。また、彼らは基本的に不法占拠地に住んでいて、いつ家が取り壊されてもおかしくなく、さらにそんな事情のため家の作りは簡素でいつ台風や火災で命を落とすかもわからないような日々を生きていました。

しかし、毎日スラムを訪れるうちに、そんな暮らしの中でも彼らはとても楽しそうに暮らしているのに気づきました。彼らは道端で歌い、ビンゴをし、安酒で昼間から酔っぱらっていて、仕事がないという若者も夢と希望があふれているようでした。

私はあるとき支援地の人に「いつか日本に暮らしたい！」と目を輝かしていわれたことがあります。その時私はふと、日本は本当にここよりもいい場所なのだろうかと思い、返答に困ってしまいました。

世界的に行われている幸福度調査で日本の順位が軒並み低いことは有名な話です。そしてそれは自殺率の高さにも現れています。（WHO の 2012 年の統計によると、日本は 10 万人当たり 23 人で 9 位なのに対しフィリピンでは 2 人で 146 位です。）確かに私はいつもフィリピンから帰ると日本に息苦しさを感じてしまいます。フィリピンではコンビニやスーパーで店員さんが歌いながら接客をしていることは当たり前ですが、日本でそんなことしていたら首になってしまうでしょう。また、フィリピンでは当たり前の LGBT も日本では異質なものとしてとらえられがちです。

経済大国でありながら自殺の多い“先進国”日本、仕事がなくても笑顔なフィリピン人、この違いは何なのでしょうか、宗教の違い？ただの私の勘違い？私にはまだわかりません。しかし途上国の人々を支援する立場である私たちはこれらの問題も考えて支援を行っていかなければならないと思います。そして FEST は最良の国際協力とは何か、という疑問の下、GDP 至上主義ともいえるような現在の支援だったり、その他もろもろについて真剣に考えてき団体だと思っています。そんな団体で国際協力というものに出会えて私はとても幸せでした。無知でいい加減なこんな私ですがこれからも FEST が最良の国際協力を探究していってくれることを願って見守っていきたいと思います。そして何らかの形でまた今後も FEST と関わっていけたらなと思います。

*杉山ゆう*

*聖心女子大学文学部*

*フォトワーク事業部*

1 年生の 4 月に FEST に入会してあっという間に 2 年半が過ぎました。私はフォトワーク事業部員として、1 年後期から 2 年後期までの 1 年間は事務局長として FEST で活動してきました。

折角の機会なので、私が FEST メンバーになったきっかけから今に至ったまでを振り返ろうと思います。私は、もともと海外に関心があって特に中学 3 年生の時に行ったグローバルフェスティバルで国際協力という分野に出会いました。そこから大学生になったら国際協力のサークルに入ろうと思って、ネットで手当たり次第探して FEST と出会いました。国際協力に携わる団体は数百、数千とある中で、私は学生にできる国際協力に関心があったのと、FEST の現地の人重視の支援のあり方に賛成して入会したのでした。(懐かしいなあ)

事業部選びではどこも魅力的で迷いましたが、学生にできることのメリットとして自分たちのやったことを発信して他学生や社会に何かインパクトを与えられたら面白いのではないかと思いフォトワーク事業部員になりました。2 年半続ける中で正直楽しいことも大変なことも色々ありましたが、最後まで私がここに居続けたのには理由があります。それは、学生として FEST でしかできない価値が活動にあったからです。学生団体なのでもちろん自分たちで全てプロジェクトを考えて回していきます。活動にはお金も時間もかかるし、いくら頑張ってタスクをこなしても給料は発生しません。でも、仕事ではないからこそ「面白そう」「効果はどれくらいあるか分からないけど何かのヒントになりそう」というものを形にしていくことが FEST ではできました。特にフォトワーク事業部では、現地に直接還元できるプロジェクトが少ないため、何の為のプロジェクトなのか分からなくなったり、本当にやって意味があるのか、世界は変わるのか？という疑問には何度も何度も打ち当たりました。全てきれいさっぱり答えが出た訳ではありませんでしたが、そういった話をメンバーとたっぷり時間を割いて議論できたのはいい経験になったのではないかと今では思います。国際協力の真のあり方を常に模索し続けたことは本当に大きな収穫です。私は FEST では一度も渡航に行きませんでしたが、共有がきちんとされていたので現地入りしなくてもパライやピナハボンの様子を知ってプロジェクトに参加することができていました。フォトワーク事業部ではジャーナル活動や現地交流プロジェクト等様々な活動を行ってきましたが、何と言っても一番の思い出は写真展『360°』を開催したことでした。1 年生の時に FEST の写真展を知って、写真による啓発活動の面白さ、幅の広がりよう、開催の難しさ（コストや運営面で）を知りました。「写真は思考の契機」とよく前部長が言っていましたが、まさにそうだと私も思うのです。言葉を使わず、

編集もせず、ただただ撮影して切り取られた一瞬から何を感じるか。そして、考えるか。言葉はありがた迷惑なことも多々あります。多くの情報が飛び交う今日、私たちは編集されて切り貼りされた報道やメディアを見続けています。もちろんそこから学ぶこともたくさんあります。しかし、一度立ち止まって自分で考えるプロセスを設けることがとても大切だと私は思うのです。写真には「これはどこだろう」「この人は何をしているのだろう」「どうしてこの現場が撮影されたのだろう」等、私たちに様々なメッセージを与える力「フォトランゲージ」があります。国際協力の最良の姿を模索中の私たちにとっては、まずは現場を「知る」という姿勢が必要で、偏ったものの見方をしてほしくなかったので複数国で、現地の人と私たち目線での写真を展示して少しでも世界に対する視野が広がってもらえれば…という想いを込めて開催しました。会場設営から展示写真準備まで全て素人学生がやるには負担も大きかったですが、開催に至るまでのプロセスから多くのことを学ばせてもらいました。

FEST の先輩・同期・後輩、特にフォトワーク事業部のみんなには感謝でいっぱいです。学生のうちにこんなに熱い想いを持った人たちに出会えて一緒に活動できて本当に良かったです！ありがとうございました。

*米田早希*

*立教大学経済学部*

*国内事業部*

（写真右）

FEST を引退だなんて、未だに自分のことのように感じられません。国内事業部的には、対象者をできるだけ具体的に設定してコンテンツを作るべきなのですが（笑）、今回はこれまでの FEST の活動を支えてくださった皆様に向けて文章を考えたいと思います。

FEST は、私を大きく前進させてくれました。昔からおとなしい性格で、人に何か話すよりも聞いているほうが圧倒的に多かったように思います。これまでを通して対人関係においてどこか諦めたところがあり、特別に好きな人もいなければ嫌いな人もいないといった風でした。友人とは、2 人でなら他愛もない話はするものの、3 人以上になると笑って聞いてばかりでしたし、ましてや人に悩みを相談した記憶は中学校までありません。心を開くための壁が人一倍厚いのだろうということと、人の話を聞くのは好きだったので自分が話すことの優先順位が下がってしまって、結果自分のことを話せなくなってしまったのではないかなと思います。そうして話さないでいるうちに、自分が誰かにとって楽しい話をできる自信がなくなり、話さなくなり、の負のサイクルがどんどん深くなっていました。

それが、FEST に入ってこうして年月が経って、自分の話をするのが好きになったんです。これまでの人生で最も人との会話に時間を費やした 3 年間だったのではないかと思います。入ったばかりのころに、なにを考えているのか自分でもよくわからないままの私の話を根気よく聞いて斟酌してくださった先輩方にとても感謝しています。

最初に入った海外事業部の土地調査班では 1 年生は私一人で、あとのメンバーは頭の回転も速くてコミュニケーションが上手な先輩ばかりでした。振り返るとミーティングでは感じたことをそのまま口にするばかりで、あまりにも任せきりであったと申し訳なく思っています。1 年の秋には国内事業部に異動しました。国内事業部ではイベントや授業等を用いた啓発のコンテンツを考えるのですが、議論の中身が驚くほど「相手のこと」なのですね。参加者はどのような話を聞きたいだろうか、どういう伝え方をするのが最適だろうか、深く理解してもらうためにはどのような具体例を出せばよいだろうか。そういう相手のことを考えることについて話した記憶がほとんどで、国際協力云々といった話よりも圧倒的に多かったように思います。海外事業部に所属していたときと同じだなあと感じます。海外事業部でも、専門的な知識のないなかで必死に考えたのは、支援地の人のことでした。自分たちのすることが支援地の人にはどのように見えるだろうか、どのように現地の人に説明をすれば現地の方たちの団結力を強め

ることができるだろうか。

ただひとつ違うのは、国内事業部の考える「相手」は、顔がわからないということです。誰だかわからないから、困ったことがあっても聞きようがない。だから想像するしかないのですが、それがもうとにかく楽しいのです！自分が高校 1 年生だったらと想像してみる。FEST に入りたてのころどんなことで悩んでいただろうと思い返してみる。けれど一人で考えるだけでは正解がわからないですから、最適解を探してそのイメージをメンバー間で正確に共有するために、とにかくプロジェクトメンバーと議論を重ねました。

不思議なもので、誰かわからない未知の相手について話すつもりでも、自分についても明かさないと正しく自分の意見を理解してもらえないのですね。もともと、話している相手に自分のことばを誤解しないように伝えることにはエネルギーを注ぐ性格なものですから、そのために必要となれば、自分の話も躊躇せずに話すことができていました。そこまで深く話そうと思っていなくても、なんでだどうしてだ、と質問攻めにしてくるメンバーが国内事業部には多かったと思います（笑)。

大学に入学する直前、同じ大学の先輩と話す機会があり、そこで初めて課外活動にサークル以外の選択肢として学生団体があることを知りました。その日から「学生団体」で検索をかけまくり、FEST に見学に行きました。絶対入ると決めました。優柔不断な私ですが、あの時即断してよかったです。私がこれだけの変化を得られたのは、FEST の事業やメンバーあってこそだと確信しているからです。

FEST を通して出会った大好きな人たちと、何年経っても夜明けまで話せる間柄でいたいです。

あまり偉そうなことを言うのは柄ではないので、引退という節目の今、将来 FEST の後輩から「FEST の昔の先輩ってこんなもんか」と言われるくらい、この団体が進化していてほしいと思います。それとともに、私自身も感性豊かでより魅力のある人になろうと思います。FEST で出会った大好きな人たちとまた夜明けまで話したいと思うから。